

第 4 1 回
和歌山県学校体育研究大会
東牟婁大会

報告書

主 催 和歌山県教育委員会 和歌山県学校体育研究協議会
主 管 第 4 1 回和歌山県学校体育研究大会東牟婁地方実行委員会
後 援 新宮市教育委員会 那智勝浦町教育委員会 太地町教育委員会
古座川町教育委員会 北山村教育委員会 串本町教育委員会

ごあいさつ

第41回和歌山県学校体育研究大会
東牟婁地方実行委員会
実行委員長 山下哲治

第41回和歌山県学校体育研究大会東牟婁大会を開催いたしましたところ、お忙しい中、県下各地域から多数の皆様方のご協力をいただき無事終えることができました。東牟婁地方という遠方での開催ではありましたが、主催者を含め200名近い方々のご参加をいただきました。これもひとえに、学校体育の研究に情熱を傾けられる関係の皆様方のおかげと、心より感謝申し上げます。

本研究会も6巡目をむかえ、そのトップバッターとして従来からの研究大会の貴重な成果を継承しながら、『生涯を通じて豊かなスポーツライフを送るために』という研究主題を掲げ、さらに小学校・中学校・高等学校別に研究テーマを設定し、研究実践を積み重ねその成果を発表させていただきました。

記念講演会では、桐蔭横浜大学の松本格之祐先生から「体育の授業で大切にしなければならないこと」についてたくさんのヒントをいただくことができました。また、校種別の公開授業、研究協議では、ご参会の皆様から多くのご指導、ご助言をいただき研修を深めることができました。この成果にたって、各校で子どもたちが生涯にわたって自ら進んで運動に親しみ、心身を鍛える能力や態度が育成されるような体育学習が展開されることを願ってやみません。

終わりにになりましたが、本研究会の開催にあたり、和歌山県教育委員会、和歌山県学校体育研究協議会、新宮市教育委員会様をはじめ、東牟婁郡内各町村教育委員会様、和歌山県立新宮高等学校の皆様、関係諸機関の皆様方からの温かい励ましとご指導、多大なご援助を賜りましたことに対し衷心よりお礼申し上げます。また、本研究会のますますの充実発展を祈念してあいさついたします。

大会役員

【会長】 石本 倫章

【副会長】 古谷 友宏 大村 哲司 山下 哲治（開催地委員長）

【顧問】 宮崎 泉 清水 博行 原見 仁志
 松本 泰幸 川島 秀則

【参与】 森 文哉 中嶋 永浩 坂口 雅紀

【委員長】 西尾 博之

【副委員長】 清水 歩 鈴木 功太

【委員】 今田 実 植山 善夫 寺本 達也
 津村 吉輝 山形 拓史 和田 通尚
 坂本 桂 脇村 直弥 高野 勉
 小谷 剛史 小川 雄三 野村 裕之
 山本 誠士 永楽 利明 太田 謙二
 菅谷 暢之 安藤 慎介 橋爪 信也
 山本 敏幸 堀川 裕史 高橋 航

東牟婁地方実行委員会

委員長	山下 哲治 (西向中)		
副委員長	山本 誠士 (西向小)	丹羽 泰一郎 (新宮高)	
事務局			
事務局長	永楽 利明 (西向中)		
会 計	坂上 尚弥 (北山中)		
事務局員	安藤 慎介 橋爪 信也 高橋 航 山本 敏幸 堀川 裕史 (以上 県教委) 福田 哲也 (新宮市教委) 草下 博昭 (那智勝浦町教委) 寒川 誠剛 (串本町教委) 山本 浩昭 (古座川町教委) 松原 貴之 (東牟婁支援事務所) 津田 和昭 (橋杭小) 熊代 多賀志 (串本中) 勝山 真葵子 (串本古座高)		

理 事

委員長	山下 哲治 (西向中)		
副委員長	山本 誠士 (西向小)	丹羽 泰一郎 (新宮高)	
事務局長	永楽 利明 (西向中)		
会 計	坂上 尚弥 (北山中)		
事務局員	津田 和昭 (橋杭小) 熊代 多賀志 (串本中) 勝山 真葵子 (串本古座高)		
総務部長	堺 高行 (那智中)	尾原 佑紀 (西向小)	
会場部長	水上 貴光 (串本小)		
渉外部長	成見 雅貴 (高田中)		
研究部長	堀口 徳正 (出雲小) 角 利則 (緑丘中) 丹羽 泰一郎 (新宮高)		

専門部

総務部員	濱地 晃志 (橋杭小)	畠 敏紘 (光洋中)
	杉若 裕介 (串本古座高)	
会場部員	下平 崇弘 (新宮高)	塚 貴記 (勝浦小)
	中野 亮 (新宮高)	柴田 圭二 (太田小)
	藪 中 (新宮高)	畑下 祐輔 (北山小)
	武田 俊幸 (新翔高)	吉村 昌晃 (潮岬小)
	鍵野 汰成 (新翔高)	寺本 匡宏 (下里中)
	坂地 純弥 (新翔高)	
渉外部員	林 宣行 (古座小)	長山 丞 (串本古座高)
研究部員	南 大樹 (神倉小)	石野 晃吏 (王子ヶ浜小)
	川口 智史 (太地小)	東 直輝 (明神小)
	西田 友行 (三輪崎小)	向井 康二 (熊野川小)
	塚 勝 (宇久井中)	橋本 紀彦 (緑丘中)
	得津 翔平 (太地中)	
会計監査	岡本 耕政 (新宮高)	藪中 秀樹 (神倉小)

顧問

地教連会長	岡田 秀洋
新宮市教育長	速水 盛康
那智勝浦町教育長	岡田 秀洋
串本町教育長	潮崎 伸彦
古座川町教育長	中道 悟
太地町教育長	宇佐川 彰男
北山村教育長	中島 良範
東牟婁地方校長会	中田 善夫 (城南中)
高等学校校長会副会長	前田 成穂 (新宮高)
東牟婁支援事務所長	水上 茂秀

第41回和歌山県学校体育研究大会東牟婁大会 開催要項

- 趣 旨 本県児童生徒が、生涯を通じて豊かなスポーツライフを実現するために必要な資質・能力を養うため、学習指導要領に基づき研究・実践をおこなっている体育・保健体育学習について県内関係者に提案し、よりよい体育・保健体育学習について研修を深めることを目的に開催する。
- 主 催 和歌山県教育委員会 和歌山県学校体育研究協議会
- 主 管 第41回和歌山県学校体育研究大会東牟婁地方実行委員会
- 後 援 新宮市教育委員会 那智勝浦町教育委員会 太地町教育委員会
古座川町教育委員会 北山村教育委員会 串本町教育委員会
- 期 日 令和元年11月15日(金)

6. 場 所

校 種 等	場 所	住 所	電 話 番 号
全体会	県立新宮高等学校	新宮市神倉 3-2-39	0735-22-8101
小学校 低学年	新宮市立三輪崎小学校	新宮市三輪崎 3-6-7	0735-31-7014
小学校 高学年	新宮市立王子ヶ浜小学校	新宮市田鶴原町 2-10-1	0735-22-8431
中学校	那智勝浦町立宇久井中学校	那智勝浦町宇久井 1073	0735-54-0013
高等学校	県立新宮高等学校	新宮市神倉 3-2-39	0735-22-8101

- 研究主題 『生涯を通じて豊かなスポーツライフを送るために』
 - 小学校 『運動の楽しさや魅力に触れ、
どの子もいきいきと活動する体育学習を目指して』
 - 中学校 『「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業の工夫』
 - 高等学校 『主体的に取り組み、課題の発見・解決を目指す
健康で安全な体育授業』

8. 特別講演

- 演 題 「体育の授業で大切にしたいこと」
講 師 松本 格之祐 氏（桐蔭横浜大学 教授）

9. 日 程

	9:30	9:50	10:40	10:50	12:00	13:15	13:30		16:00
受 付	開会式 表彰式	休 憩	特別講演	昼食 移動	受 付	小学校（低）	休 憩	研究協議	
						小学校（高）			
						中学校			
						高等学校			

10. 公開授業

学 校 名	授 業 者	領 域 (単 元)	学年
新宮市立三輪崎小学校	西田 友行	ゲーム（ネット型ゲーム） 「ソフトバレーボール」	3
新宮市立王子ヶ浜小学校	石野 晃吏	ボール運動（ゴール型） 「バスケットボール」	6
那智勝浦町立宇久井中学校	塚 勝	球技（バレーボール）	3
和歌山県立新宮高等学校	丹羽 泰一郎	体づくり運動	1

11. 研究協議会

会 場	運 営	司 会	提 案	指 導 助 言	記 録
三輪崎小	堀口 徳正 (出雲小)	浦木 源 (大島小)	東 直輝 (明神小)	山本 敏幸 (県教委指導主事)	萩坂 涼(串本西小) 濱地 晃志(橋杭小)
王子ヶ浜小	川口 智史 (太地小)	向井 康二 (熊野川小)	南 大樹 (神倉小)	竹村 伸也 (新宮市教委指導主事)	溝口 誠也(田原小) 尾原 佑紀(西向小)
宇久井中	橋本 紀彦 (緑丘中)	得津 翔平 (太地中)	角 利則 (緑丘中)	橋爪 信也 (県教委指導主事)	岡橋 友美(那智中) 畠 敏紘(光洋中)
新宮高	下平 崇弘 (新宮高)	藪 中 (新宮高)	丹羽泰一郎 (新宮高)	安藤 慎介 (県教委指導主事)	勝山真葵子 (串本古座高)

全 体 会

日時 令和元年 11月 15日 (金)
9時50分～12時00分
会場 和歌山県立新宮高等学校 体育館

1. 開会式

(1) 開会宣示

東牟婁地方実行委員会 副委員長 山本 誠士 (西向小)

(2) 開会の言葉

東牟婁地方実行委員会 委員長 山下 哲治 (西向中)

(3) あいさつ

和歌山県教育委員会 教育長 宮崎 泉
和歌山県学校体育研究協議会 会長 石本 倫章

(4) 来賓祝辞

新宮市教育委員会 教育長 速水 盛康

(5) 来賓・主催者紹介

(6) 祝電披露

(7) 次期開催地挨拶

西牟婁地方実行委員会 委員長 野村 裕之 (本宮中)

2. 表彰式

(1) 功労者及び功労団体の紹介

(2) 表 彰

(3) 被表彰者代表謝辞

3. 特別講演

演 題 「体育の授業で大切にしたいこと」
講 師 松本 格之祐 氏 (桐蔭横浜大学 教授)

4. 閉 会

(1) 閉会宣示

(2) 日程説明及び諸連絡

全体会 特別講演

桐蔭横浜大学教授 松本 格之祐 氏

演題 「体育の授業づくりで大切にしたいこと」



体育の授業づくりで大切にしたいこととお話をさせていただきます。2つですね。「目標・内容・方法・評価」のこと、それから「授業づくりで押さえないこと」という、2つのこととお話をさせていただきます。

今日は4つの授業をやられますけれども、指導案の中に示された内容というのが目標を達成できる教材かどうか、ということですね。大切にしたい目標、成果ということなんです。

もう20年近く前ですか。体づくり運動が出たときに、体ほぐしの運動が出て、文科省からも達しが出されました。そのときに「気付き」「調整」「交流」ということで、「交流」に焦点が当てられました。じゃあ、現場でどれほど、仲間との「関わり」「仲間づくり」「協力」というワードで考えられているのか、実践されているのかということで、体育の専門誌を5年間リンクしました。すべての論文に目を通しました。全部で26点あったんですね。

20年前ですけれども。その26点の中で具体的に「仲間づくり」「協力」「関わり」が深まるような内容が示されているか、そして、示した内容ではたして「協力」「仲間づくり」が達成されたかどうか、評価されているかどうかちょっとレビューしてみたら、26点の中で2点しかありませんでした。体育の専門誌にのっているような論文であっても、「仲間づくり」「関わり」というワードで、主旨通り書かれますよね。仲間と協力して学習を進める、と書かれるんですけども、じゃあ具体的にどういう活動で、仲間づくり、あるいは協力が進むようなことが図られているのか、本当にその図られたことが役に立っているのかどうか、意外と私達がないがしろにしている場合があるということ。

目標をまず書かれたら、その目標が達成できる教材、内容が準備されているかどうか、ということですね。それから指導案に示された方法、内容がありますけれども、方法がはたして目標を達成できるような指導の方法なのか、最終的にどの程度達成されたのか、この辺を大事にしていくべきではないかなと思います。一つの例としてはですね、指導案でも示されていまして、指導案を見る場合にですね、本時がうまくいく、いかないはすごく大事なんですけれども、本時がどういう流れで位置づけられているのか、確認する意味では、おそらく単元計画を逆に見て、最終的に、どんな授業をやろうとしているのか、子供達にどういう力を最終的につけたいのか、ゲームであればどんなゲームが成立するように考えられているのか、というところが逆算して、ちゃんと説明がつくかどうか。一時間の流れも同じですね。というふうなところがとても大事になってくると思います。

今、学生に指導案を書かせて模擬授業をやっているんですけども、これは体育の授業でもそうですし、保健の授業もそうです。体育の授業で、小学生相手に指導案を立てて、大学生が指導役になって模擬授業をやるんですけども、サッカーをやっている連中がですね、いきなりリフティングを始めるんですよ。小学校5年生のサッカーの授業にリフティングから始める。それからドリブル…なんですけど、おそらく中学校、高校でもゲームの中でリフティングはおそらく出てこない。例えばバスケットでも同じで、ドリブルからレイアップシュートは小学校で指導してます？指導例は見たことあるんですけども。小学校でもバスケットの授業でレイアップシュートなんて出てこない。小学生にボールを持たせると、すぐドリブルを始める。ということで、実際にゲームで想定される一番必要な技能からまず指導すべきではないか、というところなんですけれども。まあ学生のサッカー部の連中は、まずリフティング、ドリブル。それから、バスケットの連中は、パスです。ショルダーパス、バウンドパス、というようなパスで始まって、レイアップシュート。…今回NBAで八村選手が一位で指名されましたけれども、彼の高校時代のバスケットの試合を見てましたけれども、自分から切り込んでレイアップはなかなかない。他の試合を見てもそうです。まず、パスを受け取って、フェード気味にシュートを打つことが一番多いと思う。ダンクは当然ドリブルはありません。という意味で、実際ゲームに役立つ技能をまずは指導すべきじゃないかな、というところがこの一貫性を意識した授業かどうかということだと思います。

まず一つ目なんですけれども、指導案の中に示された教材、目標達成できる教材かどうかということなんですけれども、今日ボールゲームがいくつかやられます。ソフトバレーボール、バレーボール等々やら

れますけれども、教材が先の授業…。私達が中学高校の時はもう最初から「種目」でした。サッカーやるぞ、バスケットやるぞという種目だったんですけど、今は「型」になっています。みなさんがご存知のように、ゴール型、ネット型、ベースボール型、今日はネット型の授業が小学校中学校でもありますけれども。ボール操作はなかなか定義しないものですが、ボールを持たない時の動きはおそらく学習が共通しているのだというところで、そういう「型」が出てきているだろうと思います。なので今はスポーツ種目を教えるのではなくて、発達段階の子供達を踏まえながら、もう少し大きい目で、その種目を教えるのではなくて、その種目で何を教えるかというところが問われている、大事にされているところだと思います。

目標が達成できる方法、指導かということなんですけれども、ボール運動、球技を例にしてみますとですね、僕個人はこのように考えています。ボール運動、球技の授業を変えようと思うならば、まずはボールに着目すべきだろうと思います。今日の3年生のソフトバレーボール、当然ボールは、子供達が当たっても痛くないボール、あるいは滞空時間が稼げるようなボールを使用していると思います。

自分がまだ教員になったばかりのころ、小学校5年生のバスケットをやったんですけども、どうしてもゴールに届かない女の子がいたんですよ。これももうゴールを下げるか、あるいはボールを変えるしかないですね。ゲームを劇的に変えるのはおそらくボールではないかと。ボールの大きさ、数、硬さ、弾み具合、転がり、ボールが固くて痛いのであれば、空気を抜いてあげればいいし、例えば、ドリブルをなしでやるんだと、少し空気を抜いたほうが痛くもないし、ドリブルが通用しない。ボールを変えてみるのがおそらく劇的ではないかなと、逆に言えば、先程～型と言いましたけれども、ボールが変われば、ボール操作は必ずその種目の中で指導せざるをえない。

次はゴール。ゴールの大きさ、数、位置、ゾーン、得点方法と書きました。今日はバスケットボールで、入った場合とリングに当たった場合で得点方法を変えていました。なかなか、シュートが決まりにくい小学生で、ゴールが決まりにくいというところがあると思います。僕の父親がですね、どうしても入らないから金具屋さんをお願いして、大きいゴールにとかけていました。とにかくゴールが決まらないと面白くないところがありますんで。

それから、得点方法は言ったように、全員がシュートする楽しさ、あるいは得点する喜びを味わうためには、ゴールの位置を少し考えてみましょう、ということです。

それから、コート。広さ、幅、グリッド、角度と書きましたけれども、これは人数との関わりがあります。今日はバスケットですね、5対5ではありません。指導案は。見ていただければわかると思いますけれども。4対3だな。小学校で5対5はおそらく僕は必要ないと思っています。バスケットボールを教える必要はない、むしろ、できるだけ多くの子がボールにさわると。あるいはシュートを打つ。ゴールを決める喜びを味わわせるのであれば、できるだけ少ないチームの方がいいと思う。たしか今日も4人一チームで3人組ではなかったかなと記憶しています。

コートと人数の関係ですね。最少は一人なんですけれども、ボールを持った場合、パスを考えると、パスコースが二つあった方がいいと思います。3人かなと考えています。これは、パスを考えるとということなんですけれども、これはルールに関わらずですけども、バスケットでボールをもらったら、どうするか。子供達にドリブルをOKすると、すぐにボールをつき始めます。おそらく、これはサッカーもバスケットも同じだと思いますけれども、ボールを持ったらまず自分がシュートを打てるかどうか。打てなかったら、シュートを打てる仲間がいないかどうか、最後にどうしようもなかったらドリブルでゴールに近づく、あるいはパスが出せる位置にまで動いていくというような話になると思うんですけど。

最小限のルールと書きました。と言うことはですね、特に小学校は、中学校もそうだと思うんですけどもできるだけそのゲームのおもしろさを損なわないレベルで、できるだけオフィシャルなルールを崩してみる。これは先ほどお話ししたように、ボールもそうですし、ゴール、コート、人数もそうですけれども。できるだけ崩してみる。ゲームが成立する最初のルールをまずは決めてみましょうということですね。

それから役割というふうに書きました。特にこれは、ゲームに出ていないときにどういう役割を与えるかと言うのが、すごく大事になると思っています。これは、ボールゲームだけではなくて、例えば、たまたまですね、昨日1限目、中学2年生を想定した模擬授業を学生がやりました。マット運動です。彼の頭がないのでしょね。とりあえずもう、何をやらせるかということで頭いっぱい。マットを用意して、グループのメンバー、ずっと縦に並んでいるだけなんです。指導案の中にはお互いの良い所を見つけ合う、伝え合うと指導案に書いてくれているんですけども、マットの後ろに並んでいるだけ。

これ、ただ待機しているだけですよね。仲間と、仲間の動きを見てよい動きを伝え合う、褒め合うのであれば見る意識がなければだめです。ということで、特に運動をしていない時に、どういふ〇〇をさせるかという視点が体育の場合、非常に大事になるんじゃないかと思うんです。ボールゲームと言えば、ゲームに出していない、これは応援するんでもいいでしょう。あるいは中高だと、小学校高学年でも、ゲーム要素、だれがシュートをしたか、うったか、決まったか、あるいはどこにそういったパスを出したかという記録がおそらくとれると思います。そのことによって、次の授業、ゲームを振り返るいい材料になるんじゃないかと思ってます。全員に役割を。

私達は授業だけではなくて、例えば、朝の会で児童生徒に話をしています。それから掃除の分担もあって、掃除の場所に行って我々もやっています。はじめはですね、先生もいっしょに掃除の場所に行くと思うんですけども、はっきりしていますね。先生がいるとしっかりやるんだけど、先生が行かなくなると、だんだんいい加減になってくるんですよ。やっぱり役割を与えても、与えた役割をちゃんとやっているのかどうか、評価をしないとなかなか定着しないということですね。だからいい役割をちゃんとやっている子には、それなりにきちんと評価をしてあげましょう。あるいは全体の場で評価することによって、そういうことを広げていきましょうという活動が大切になると思います。評価ですけども、評価と聞くと非常に冷たそうなんですけれども、それは評価と評定をごちゃ混ぜにしているんじゃないかと思っています。

評価は、いつ評価するか、今回も子供達がこの運動に対して、どういふ受け取りをしているか、先生方、授業者が子供達からアンケートをとってデータを、これは診断的ですね。今子供達はどんな状況なのか…。形成的というのは、毎時間授業をやったとき、子供達が技能的に、態度的に、知識理解的にどれくらい毎時間獲得してきているのか、というところを毎時間見ていきましょう。それを見た結果は次の授業に返していきましょう。総括的は、最終的に最初に立てた目標がどれくらい達成されたのかを評価する。

それから誰が評価する、これは先生が個人で評価する、あるいは児童生徒が自ら評価する、仲間が評価する、先生が自分の授業を評価するという意味で自己評価、他者評価、相互評価と書きましたけれども、誰が評価するのか、これは、先生や生徒がですね、次の授業でどうするか、どう生かしていくかという、評価の観点を示すことによって子供達がそれを意識してくれるということがあります。ちょっと大変なんですけれども、一枚学習カードをちゃんと一時間目に渡せるかどうか非常に大きなところで、どういふ観点で子供達は毎時間自己評価していくか、あるいは相互評価していくかというのを、毎時間チェックをさせる。○でもいいし、△でもいいし、◎でも構わないですけども、簡単に評価をしてきて、それを基にして自分の授業を先生が振り返る。

それから、どのように評価するか。今は絶対評価ですけども、相対評価ではないですけども、子供達はどうしても友達と評価をしてしまう。「あの子よりも、自分の方が上手だ。」「私はあんなに上手じゃない。」これ、相対評価ですね。先生は基本的に、個人内評価であるべきだろうと思っています。その子がどの程度伸びていっているのか、あるいはつまづいているのかということを含めて、個人内評価をしていけばいいだろうと思っています。

どの程度目標が達成されたのか、と言うことなんですけれども。毎時、これは先程形成評価でも述べました。単元全体で、一年間、小学校で6年間、中学高校だと3年間。指導案レベル、年間指導レベル、カリキュラムレベル…これは振り返って、自分の学校なり、学年なり、あるいはクラスの実態に応じて、ちょっとずつ変えていかないと、だんだんと年間計画、あるいは指導案に子供達をあてはめることになってしまうだろうと思うんで。これはフレキシブルにちょっと振り返る必要があるんじゃないかなと思っています。そのためには、どの程度達成されたか、子供達の様子を先生たちは振り返る機会がないと改善されないとと思っています。基本的にですね、ボトムアップがどうなのか。つまり、体育がちょっとあまり上手ではない、苦手だという児童生徒が、どの程度授業によって伸びていくのか、あるいは伸びていくことによって、自信をもっていくのか、ということがすごく大事になってくると思います。毎年3、4回、多い時は4、5回、授業を見る機会があったんですけども、その中で、こういう話をする、ある先生から、「先生、上手な子はどうするんですか。」っていう話が出てくる。「上手くない子に焦点を当てて指導を考えていらっしゃるんですけども、上手い子はどうするんですか。」…そういう話が出ました。一つは、優先順位をつける、どっちを先に考えるか。上手い子をさらに伸ばすための授業を考える、あるいは、あまり体育にいいイメージを持っていない、あるいは自分に対して自信を持っていない子供達にまず焦点を当てるか、どちらをまず焦点を当てるか。例えば、部活でサッカーやバスケ

ットをやっている子が体育の数時間で、彼らはあまり上手くない子といっしょにゲームをやっている。部活の子がしょっちゅうゲームに出て、活躍している子を、体育の授業でサッカーやバスケットで技能が伸びていくか、別の役割を与えるべきじゃないかなと思っています。まず、ボトムアップを考えましょう。

それから評価と評定の区別を明確にしましょう。評価はですね、基本的に、取り組んでいる児童生徒を認め励ますためにあると思っています。授業で、何かに取り組ませる、あなたはできる子、あなたはできない子、区別するために評価をするのではない。まず評定の基準、評価の基準を言えば、技能が低い子でも、おそらくその子なりにできるレベルというのがあるはずなんです。そこまでおいて考えなければいけないと思っています。ですから授業が、スタートするときに最初からできない、できないと言っている子がもっと高いレベルになったらもっとできない、もっとできないになっちゃいますよね。そうすると、その子なりにできるレベルはどこなんだ、ということ。さっきのバスケットで言えば、ゴールにボールが届かない子を何度も何度も繰り返し練習させるのか、届くまで。あるいは、先程言ったように、ボールをかえてとりあえずシュートができるレベルまで考えてあげるのかというところが分かれ目になるんじゃないかなと思います。

P D C A サイクル、これは先生方も、もうよくおわかりのことだと思います。

それでは、先程言った逆から見る本時、単元の計画なんですけれども、逆に見るということはですね、一貫性がはたして意識されているかどうか、一時間一時間の積み上げなんですけれども、最終的な、子供達をどの辺まで先生が連れて行こうとしているのか、あるいは連れて行くことが可能だと考えているのか、ということです。

ボールゲームの流れで考えてみると、先程言った様に、ボールが違えば、ボール操作が非常に難しくなります。ですから、そのボールに慣れるということが大事になってきます。先程言った様に、ゲームに一番必要な技能が、個人技能を高めるような取り組み。それから、それをもとにグループで共通課題。作戦でもかまわない。先生からの与えた課題でもかまわないですけれども、それができるかどうか。それがゲームで通用するかどうか、生きるかどうかという確認のゲーム。

つまり、今日のゲームに生きるようなチームの練習。チームの練習を支えるような個人技能。逆の方からから見ていっても説明がついているのかどうか、ということなんです。

もう一つは、先程もお話したように、単元の流れとして、最後の授業から見て、毎時間の授業が、最後の授業を支えるような授業になっているかどうか。大変なんですけれども、最後の授業を想定して、学習カードが作れば、あとは見通しがあって、子供達も学習カードを見れば自分達が何をやっているのかわかる。毎時間の記録を継続してとって、自分がどれくらい伸びているか自覚できる。そういう流れに、是非していただきたいなと思っています。

期待する学習成果の例なんですけれども、自分が教える3年生が4年生に上がる時に、体育の授業についての感想を書いてもらいました。それを整理した結果、4つに整理できたということですね。子供達は、もっと夢中になって取り組みたい、ぶつぶつちぎれるような授業でなくて、まとまって思い切り運動に取り組みたい、ということ。それから、上手にしてほしい。一緒に学習する仲間と仲良くしてほしい、学び合い、認め合う子供の姿。それから、何かをするときに、どういうやり方をやったら上手になるのか、運動のポイントはどうなのか、ということが学習できる体育の授業。ということで、書いたことを整理した4つでした。これは、私の先輩で、1970年代に「高田典衛」先生が高田の4原則ということを言われていたんですけれども、それにちょっと似てるかなというところなんです。

…夢中になって取り組む子供の姿なんですけれども、学びに向かう力ということになるのでしょうか。関連教材の考え方、素材の教材化、教材や指導の適切さというのが、おそらく大事になるとしています。後で具体的に触れていきたいと思っています。つまり何かをやりたいときに、いきなりそのものをやるんじゃないで、それに関連したものから始めていきましようというところですね。

伸びを自覚できる子供の姿、知識技能に関連したところかなと思います。子供達が上手になっていくためにはある一定の時間と場を保障する必要があると思います。先生がどの程度の割合で話をしているのか、何回集めて話をしているのか、あるいはマネージメント、学習係が記録したり話し合ったりしている認知学習、最後に運動学習の4つの場面で、授業時間小学校45分、中学校50分授業の半分50%は運動する時間に取り組んでいるのでしょうか。そのためには、先生の説明が長くなるようでは困るので、それからマネージメント、物を用意したり片づけたり集合したりする時間がだらだらしていたら当然運

動する時間が少なくなってしまう。まず運動する時間と場を保証しましょう。

それから具体的で実現可能な目標を設定しましょう。これは先生から示すのか、あるいは仲間の動きを見て理解をさせてやるのか、やってみて子供達から意見を聞いて運動のポイントを確認するのか、いろいろやり方はあると思うんですけども、ただ単に繰り返すだけではなくて運動のポイントを考えながらやらせましょう。それから、興味をそそる運動、運動のやり方、これがとても大事だと思うんですけども、これが教材研究の一番の醍醐味かもしれません。どうやったら子供達が「やってみたい、おもしろそう、と思ってもらえるかどうかですね。

それから学び合い、認め合う子供の姿、関わりという表現も同様かと思います。思考力、判断力、表現力で表されていますけれども…。思考力、判断力、表現力は並列ではなくて、まず思考判断があって、それをどうアウトプットするか、表現するかというところです。思考力、判断力のない子供に表現しようと思っても、これはちょっと違ってくるかなと…。まず思考、判断があって、表現。私の恩師「高橋健夫」先生がよく言われていたのは「授業の勢い」「授業の雰囲気」。先程運動する時間を保証しようと言いましたけれども、中学校の50分授業で50%の運動する時間を確保していても25分。その内運動する場面が10あると1回が2分30秒。運動する場面が5回だと5分。という風に、授業が寸断されると勢いが出てこない。たっぷり運動をさせましょうということですね。それから授業の雰囲気も勢いに関わってくると思うんですけども、指導要領で「深い学び」を実現するような子供達の対話で関わり合う、なおかつ取組が主体的であるという所なんですけれども。

例えば、授業の中である子がなかなかうまくいかない時に、うまい子がちゃかすような態度をとるグループがある、あるいはできない子にみんなに関わって、どうやったらうまくなるかいっしょに考えてあげるグループがある。これによって授業の雰囲気が全く変わってきます。それが一番見えるのが体育の授業だと思っています。主体的・対話的で深い学びが一番見られるのは、おそらく体育の授業だと、個人的には思っています。体育の授業が、おそらく関わりという授業の雰囲気、子供達が学んでいる実態が一番見えやすいと思います。クラスの学級経営も見えてしまう。普段の先生の指導の様子、先生の子供達の関わりが見えてしまう。体育の授業によって子供達の間関係、学級経営にも影響を与える。そういう可能性があるのは、体育の教科としての特性だろうと思います。先生の一言で、仲間の前で失敗するといつもばかにされるからいやだと言う…そういう子供を育てる可能性も一方であると思います。

学習内容・方法の理解を深めていける学習者の姿、知識、理解なんですけれども、充実した言語活動、これは時間とか回数とか、そもそも体育では…というところです。小学校2年生の跳び箱の授業。30分間跳び箱をやりました。5分で一人一人取組を振り返りました。次の5分が、グループで今日の授業の取組について振り返る、最後の5分が全員集まって、クラスとして今日の授業を振り返る。小学校の授業45分ある中で運動に関わる部分は30分、それ以外で言語活動、表現に関わる時間が15分。その学校の研究会が言語活動を充実させようというテーマでやっているんです。おかしくないですか。体育は言語活動を充実するためにあるんじゃない。その場合は話し合う時間や回数が問題になるんじゃないかなと思います。例えば、各自5分間で振り返りましたけれども、1分たったら、ぶらぶらしています。グループの話し合い、クラス全体の話し合いで活発に発言する子が何人かいて、他の子はそれを聞いているだけ。実にもったいない。もうちょっと運動やらせてやれよと思ってしまいますよね。

日常的な授業の中で、意見の発表とその評価。子供達に発表をさせる時に、発表することそのものを評価する、発表した内容について評価する、2つがあると思います。そのことによって、運動のポイントの共有化ができると思います。それから数字でも構わないと思うんですけども、具体的に記録を残さないと振り返りができない、例えばボールゲームでバスケットであれば、10回シュート打って何回入ったかでも構わない、単純なことでも構わない。それをずっと継続していくと、どうやったら回数を増やせるかということが学習内容になってくると思います。その記録に対して先生がコメントを加えることによって、子供達の学習が深化してくるだろうと思います。

授業づくりの内容で押さえないこと7つをお話させていただきます。

先程言いました、運動学習を確保しましょう。そのためには、先生の説明・演示は必要ですけども、できるだけ的確にやりましょう。学生が模擬授業をやると、学習指導、先生が説明することが指導をしている、一番大事だという風に勘違いをしている。説明が終わったらあまり関わりを持っていない。そうではなくて、できるだけ手短かに。それからマネージメント、準備や片づけ。これは単元の一時間目、二時間目はどうしてもここに時間がかかると思います。このグループはここに準備し、このグループは

これを片づけましょう…という約束をしなければいけない。これをちゃんとやることによって、単元が進むにしたがって、マネジメントの時間が極力少なくなるということですね。それから認知学習、話し合いやカードの記入。これは、大事なんだけど必要最小限におさえましょう。そういうことをすることによって、運動学習の時間を増やしていきましょうということです。

運動学習時間と活動量ということですが、一人一人の事で考えると、先程マットの話をしましたけれども、40人で跳び箱が2台だとすると、跳び箱1台で20人。4つの跳び箱だと10人…という風になります。つまり、運動している時間だけではなくて、一人一人がどれくらい取り組んでいるのかということで行くと、全員に持久走をやらせると、全員で25分間運動して、5人で代わりばんこでやるよりも一人がずっとやってる方が活動量、質も確保されるんですけども、じゃあ持久走はどうでしょう。子供達は喜んでやっていますか、という話になりますよね。決してそうではない。

やっぱり、もっとうまくやりたい。自分の課題を達成したいという目標があって、それに向けてもっとうまくやりたいというところで、そういう思いがあれば、おそらく子供達は意欲的に取り組むだろう。

だから持久走に対して自分なりの目標なり達成課題がちゃんと把握して行ってやれば、おそらく何もなただ走るよりは意欲的になると思います。

体育の授業の構造…「できる」というのは、運動技術の学習。「関わる」というのが社会的行動学習、「わかる」というのは認知的反省的学習。これが体育の授業で中心になる。つまり、それぞれ個人やグループがもっとこうしたいと願って、そういう願いを持った子供達が関わって、お互いで教え合って高まり合うという関係で。わかるというのは、技能はどうやったら伸びるのか、あるいはその運動そのものは何がポイントなのか、ポイントと、それからそれを高める方法、つまり認知的反省的学習が相まって、体育の授業が成立する。昔は楽しい体育と言われていて、楽しむというのは、単元が進むにしたがって、あるいは最終的に、この授業やって良かったなというふうに思ってくれればいいのか、と思います。

達成感ですけれども、連続した達成感、スモールステップと書きましたけれども、何か達成基準を一つ決めましょう。その基準をこえたら○、こえなかったら×。ところがこの×の中にもよく見ると、×の中にもステップはいくつも作れる。一応できたの中にももっとステップが作れる。そういういくつかのステップが作れば、なおかつ、先程言った自分があまり得意でない子でも、とりあえず自分がスタートできるレベルが見えてくれば、次にステップが見えてくる。自分でもできそうだと思うかどうか、これが大事なんじゃないかなと思います。授業の中で、できたというのは見栄えがするし、いいんですけど、授業が終わった後「もう少しやらせてください」という子供の多くが「自分でもできそうだ」と思えるかどうか。これを考えると、授業の設定が変わってくるだろうと思うんですけど、授業の中で全員の子ができたで終わらないで、できそうだった段階で授業が終われば、おそらく休み時間にやれと言われなくても取り組む子が出てくると思う。授業と授業の間で取り組む子が出てくる。授業の中で「自分でもできそうだ」と思わせられるかがすごく大事じゃないかなと思います。

先生が児童生徒に授業でどう関わるか、関わりの回数が多ければ多いほど、児童・生徒が授業をよく評価するという話を聞いたので、自分の中で実際にやってみたくてです。3年生のマット運動39人にできるだけ声をかけました。授業が終わった後に先生に声をかけてもらいましたか、役に立ちましたかという項目でアンケートをやったら、39人中8名でした。やたら声をかけてもだめなんですね。本当に伸びたとき、あるいは困っているときに声をかけないと、終わった時に子供の心に残っていない。

見ている人にとっては、すごく活気のある授業に捉えてもらったんですけども、ただ声をかけるだけではだめだと思いました。

学習集団の育成なんですけれども、個人種目、今日は新宮高校の方で高校一年生の体づくり運動をやられますけれども、個人種目ほど集団的な評価をしてほしいと思っています。個人種目だから個々の技能の伸びが問題なんですけれども、個人種目ほど、仲間同士がどう関わり合っているかという所を、先生達が授業の中で意識して、指導して、そして評価する必要があると思います。個人種目ほど意識してほしいということですね。極端な例ですけれども、子ども達が何かできたというときに、私たちが毎時間その子に関わっているのではなくて、その子に関わっているグループの仲間が一番関わっている。その子ができたときに、その子はもちろんですけれども、その関わっている集団をどう褒めるか、できれば、まず仲間を褒める、仲間を評価する、それを全体で評価すれば、おそらく他のグループも取組が変わってくるだろうと思います。集団的な評価がとても大事になると思います。逆に集団種目ですけれども、今日ボール運動をやられますけれども、ボール操作技能だけではなくて、ボールを持たない

動きが大事だと言われるんですけども、そういう動きをした子を、ボールを持った子が見つめる努力が必要ですよ。とらえる力が必要になるので、ボール操作だけではなくて、ゲーム要素を見る力、あと個人の能力が高まっていかなければ、おそらくゲームの質は高まらない、と思っています。集団種目だからグループで何かやっていたら、なんとなく楽しそうにやっているなと思って、一人一人はどうなのか、というところを見ていく必要があると思います。知識・理解、技能ということですね。

逆に言うと、球技ほど個人の学習の高まりを保証し、確認するのは非常に難しいではないかと思っています。例えばゲームを10分すると、授業、ゲームは流れるけれども、そのゲームを通して個々がゲーム要素をふり返って、高まっているのかどうか確認するのは非常に難しいところがあると思います。教師も関わりは積極的に、肯定的に、具体的に関わっていきましょう。

下位者の引き上げなんですけれども、実情は体力の2極化の拡大と言われています。「体育嫌い同盟」というのがあって、ネットで「水泳嫌いです」と入ると、体育嫌い同盟に入れます。中身を見るとほとんど、中学高校生が入っています。6位はドッジボールです。アメリカでは、ドッジボールは州によって禁止にしているところがあるそうです。これは非常に協力的ではない。嫌がる子にボールをぶつけて、これは教育的ではない。5位は水泳以外。水泳は得意だ、だけど、それ以外は嫌いだ。

逆に、3位は水泳。潜れません。浮けません。進めません。これは嫌いになりますよね。4位は球技全般なんです。ゲームの中でボールが回ってこない。野球は投げられません、捕れません、打てません。2位は持久走。1位は体育全般。逆に言えば、何か一つでもいいから子供達に自信のあるものを身に付けてあげれば1位の数が減ってくる。体育嫌い同盟の4割が1位になっています。これをなんとかしてあげたいと思っています。…潜れません、浮けません、進めません。投げられません、捕れません、打てません。これ、なんとかありませんか。ボールが回ってこない、じゃあ回ってくるグループ、チームの人数にしましょうよ。指が折れた、じゃあ折れないように個人技能を高めましょうよ。個人の技能の伸びを保証していくことによって、減っていくんじゃないかと思っています。

具体例として投能力。投げる動作をビデオに撮って、ビフォーアフターで比べる。投げる動作を実際に子供達にやらせて、実際にどれくらい投動作が高まったか、あるいは投げる距離が伸びたのかをしました。投球力の低下が言われていますけれども、動作としてはラケットやバットで物を打つ動きと同じなんです。ねじりの動き。蹴る動きも同じなんです。ラグビーでも真っすぐに走らないで、斜めから走りこんできて、体のねじりを使って、ボールを遠くに飛ばしている。だから投げる動きがまずいと、打つ動作もぎこちないし、蹴る動作もぎこちない。それから、投げたら捕る。捕る経験も少ない。投げる経験も少ない。

2年生でボール運動と言うことで、シュートボールをしました。これはポートボール台の上に、一斗缶に乗せて、それを当てるというだけです。2年生なのでボールを持って走っていい、走って行って直径3mの中にある一斗缶に当てる、ただそれだけなんですけれども。投能力の向上、これは壁から3mラインを引いて、それをしっかりまたぐように投げようということをやってもらいましたが、壁に届かない女の子が2人いました。それを何度かやっていただいて届くようにしました。それが的当てゲームなんですけれども。下位者のシュートなんですけれども得点を工夫しました。最初に的に当たると十の位に点数が入り、2回目以降は一の位に点数が入るようにしました。23対30の試合がありました。通常だと5対3で23点のチームの勝ちなんですけれども、なんとかまだ得点したことがない子にボールを回すようなゲームができないかということでちょっとルールをいじりました。投能力の向上と技能の下位者がなんとかシュートを打てないかというために作ったルールです。なんとか工夫して、目標を達成できるようにしましょう。

逆上がりなんですけれども、逆上がりは、逆さになって後ろに回りながら鉄棒の上にかかるものです。大体幼稚園から一年生に上がってくる時にやらせると2割から3割できます。できる子とできない子をどう分けるか。7割から8割の子をどうするかということがとても重要になってきます。そうになると、逆さになって、後ろに回りながら、鉄棒の上にあがる。じゃあ後ろに回ることを、逆さになることをまずやってみたらどうですかということで、後ろに回るのはマットの後ろ回り。基礎になる動きが前後に揺れるゆりかご、それから顔よりおしりが高く上がるアンテナ、背支持倒立ですけども、こういった動きをやることによって、逆上がりの動きに近づいていける。後ろ回りができても逆上がりができるかどうかは保証できませんけれども、後ろに回ることに慣れれば補助での逆上がりができるでしょうということです。補助での逆上がりは10秒間に3回ぐらいできると、一人でできる力がかなりついてきているんですよ。だから10秒間で3回できる子はみんなの前で1回やらせるようにしていました。とい

うことは、一人でできなくても、友達の補助ありで何回できるかというのがその子の課題になるということですね。

わかってできる体育をやれと言われるんですけども、わかったけどできないのが体育の悩みですよ。わかっててもできない、それを埋めるのがやはり練習の回数だと思うんですよ。もちろん、どう練習をやるか、ということが必要ですけども、今まで経験していない動きは体が経験していないので、ある程度意図的に動くためには、その動きに慣れざるをえない。逆上がりには慣れてないのに、腕を曲げろ、お腹に力を入れろ、無理ですよ。動きに慣れてくるから、ある程度自分で意図的に体を動かせるようになる。そのためには量が必要だろう。その量を保証することによって、質の向上にも結びつくだろうと思っています。繰り返しやることによって体力の向上につながる。

効果的なマネジメント、主眼はスムーズに、効率よく。ねらいは、引き締まった授業、運動時間の確保、先程運動時間の確保と言うことで、マネジメントということを行いましたけれども、準備片づけがさっさとできる、移動が機敏にできる、これはとても引き締まった授業になります。それからいちいち先生が注意をしなくてもすむ。スムーズにいきます。引き締まった授業だし、ある意味温かい授業にもなってくると思うんです。結果的に運動時間も確保できる。

集め方、並ばせ方、話の聞かせ方、用具の準備、片づけ、教師の説明の仕方。これは先生が事前にどれくらい考えているか、これが、マネジメントで考えておくべきことだろうと思います。これを私は構造化されたマネジメントと言っていますけれども、いかに効率よく、意識的に授業の中で子供達に指導していく、それができたら褒める。評価をしてあげるということですね。

先生の声かけ。模擬授業で学生には100回は声をかけると言っています。どうしても最後のゲームは声かけをしづらんですよ。ゲームが始まっちゃうと、なかなか声をかけられない、どうやって声かけをしますか。ゲームの中でも、今日のためあてに関したことで声かけをどんどんしていきなさい。そして、100回は声かけをしよう。学生には、今日の授業のねらいをしっかり理解することと、積極的に声かけをする、その結果として授業の雰囲気も良くなるし、学習成果にも結びついてくるだろうと思っています。実際には、児童生徒が相互にいかにか声をかけるかということに関しても先生が視点を持っていかなければいけないだろうと思っています。

最後、安全への配慮ですけども、授業での傷害事故の実態、球技と器械運動について、それから重篤事故の実態、特に跳び箱運動での指導の見直し、ということで。傷害事故では、サッカーゴールが倒れて、中学生が下敷きになって亡くなったんですよ。文科省がサッカーゴールを固定しましょう。だけど現実的には、ほとんどが固定されていない。訴訟問題で争う段階までできています。それから跳び箱、中学生が跳び箱で落下して首から落ちて、半身不随になっています。これもひょっとすると、訴訟問題になるかもしれません。健康増進、あるいはたくましい体、技能の伸びというのをねらって体育の授業をやっているんですけども、そこで事故が起きてしまう、重篤な事故が起きてしまう、ということは決して望ましいことではない。むしろ、いかに減らしていくかが大事になってくると思います。

これは、部活と体育の授業を合わせた発生の割合です。センターには「各学校から病院に行きました。お金を保証してください。」というケースが集められています。一番多いのは、小学校、跳び箱約2割。バスケット、サッカー、フットサル。中学校はバスケットボール、サッカー、フットサル、バレーボール、中学校はみんな球技。高校はバスケットボール、サッカー、フットサル、それから野球。これが体育と部活動の中での発生の割合です。じゃあ、体育の授業だけで見たらどうなのか。小学校の場合、跳び箱は授業に限ってみると4分の1。バスケットボール、そして、マット。授業で見ると、器械運動、跳び箱1位、マット3位。それから球技のバスケット。中学校は、全て球技。高校も同じです。給付金5万以上で見てみるとどうなのか、給付は実際に払った3割+交通費1割、4割という計算をしています。給付金5万ということは実際にかかった医療費は12万5千円なんですよ。12万5千円の医療費は重篤な捻挫か、骨折です。見てみると、小学校、跳び箱は3割。鉄棒、それから障害走となっています。中学校は、跳び箱、マット、サッカー・フットサル・バスケットボール。高校は、サッカー・フットサル、バスケットボール、その次に柔道がきています。数で言うとボール運動が一番多い。ただ重篤事故だと、器械運動が多い。そのことを頭に置いていただいて、いかに安全を確保しながら体育の授業をやっていくかということを先生方の心の中に入れておいていただきたいと思います。跳び箱を例に出してみましたけれども、小学校と中学校は骨折が一番多い。高校は捻挫。負傷部位の割合は、小学校は手指。中学校では、手指に加えて足関節。高校では足関節となっています。

指導要領が変わりました。来年の4月から全面実施です。誰が成果を上げるのか、というのがあるん

ですね。学習指導要領を変えている先生方、彼らがいかに頑張って学習指導要領を作ったか。改訂の度に、現場にとっていい学習指導要領になっていると思いますけれども、学習指導要領が変わって学習の成果が上がっているかという、そんなことはなくて、頑張る先生が授業で児童生徒を変えていかない限りは、教育が変わらないですよ。彼らが頑張って作った学習指導要領を理解していただいて、子供達が体育の授業が楽しい、やってよかったと思えるような授業をいかにやっていくか。それが保証されない限りは、学習指導要領に示されたこと、主体的、対話的で深い学びということが掲げられていますけれども、それも「絵に描いた餅」になるだろうと思います。

実は、もうすでに次の学習指導要領の改訂の動きも出ています。ここで言えるのは、学習指導要領を一生懸命変えてくれているんですけども、それは目の前の児童生徒のことを考えて、はたして変わっているのか。別の要素で変わっているんですよ。社会の流れにどう対応するのか…等。なので、授業をやって子供達が変わらなければ子供達に合わせて授業を変えていく。指導要領に合わせて授業をやって、子供達を変えていくのではなくて、子供達に合わせるような授業スタイルで、僕はいいんではないかと思っているので、先生方が自信を持ってやっていってください。こうでなければ子供は変わらない。ですから子供達を変えていく、日本の教育を変えていくのは自分達だ。なおかつ主体的、対話的で深い学びに一番力を発揮するのは保健体育の授業だということを、自信を持って取り組んでいただければありがたいかなと思います。

時間になってしまいました。今日は、ありがとうございました。

小学校部会 (低学年)

研究主題

「運動の楽しさや魅力に触れ、どの子もいきいきと活動する体育学習を目指して」

ネット型ゲーム（ミニソフトバレーボール）

小学校低学年部会

会場 新宮市立三輪崎小学校
授業者 西田 友行 (三輪崎小学校)
運営 堀口 徳正 (出雲小学校)
司会 浦木 源 (大島小学校)
記録 萩坂 涼 (串本西小学校)
濱地 晃志 (橋杭小学校)
提案者 東 直輝 (明神小学校)
指導助言 山本 敏幸 (県教委)



研究協議

1. 授業者より

本校の児童については、運動は好きだが苦手を感じている児童もいる。プレルボールとも迷ったが、ボールが落ちるまでにボールの下に入るなどの身体感覚を身に付けてほしいと考え、ボールを落としてはいけないソフトバレーボールを選んだ。

指導については児童の実態や本教材の運動特性を踏まえた上で、授業を構想するにあたり、東牟婁郡の「運動の楽しさや魅力に触れ、どの子もいきいきと活動する体育学習を目指して」ということに合わせて単元構想するにあたり、2本の柱で考えた。1つは主運動につながる準備運動の充実。準備運動を充実させることによってスモールステップで身体感覚を身に付け、主運動につながっていくと考えた。もう1つは児童が取り組みやすいゲームの工夫。運動が苦手な児童でも取り組みやすいルールの設定や場づくりができるのではないかと考えた。また、ボール運動系における知識技能の系統は2年生までに経験があり3・4年生で系統を踏まえ5・6年生につなげていくことを考えた。

本時では、思考・判断で様々な並び方について考えるという学びをねらいとした。並び方について考えることでボールの下に入りやすくなり、またボールの操作がしやすくなることにつながるのではないかと考えた。授業の前半、児童が流れを把握して動くことができた。ゲームの運営も児童が役割分担をし、スムーズに行なうことができた。失敗だったと思うところは、並び方を考えさせた時に、選ばせるのではなく渡してしまったために1から考えるチームが多くなってしまい、時間がかかってしまった。また、ゲームの説明も丁寧にしすぎたために長くなってしまった。そのために、ゲームの途中で集まり振り返りをする時間が取れず、振り返りカードでの評価がしづらくなった。

指導案を書く前では、ボールの落下点に入ることに加えてボールをはじいてラリーをすることを考えていたが、実態を踏まえて、単元の途中でボールをキャッチしてもよいことに変更した。

最後に中学年でネット型のゲームをするにあたり、ネット型の特性を踏まえた力をつけるためにどのようなルールや場作りなどがいいのかを教えていただきたい。



2. 質疑応答、意見、感想

御坊市 教諭

子供たちが準備できるシステムやパワーポイントによる視覚化、ホワイトボードなどの思考ツールを使っていて有用性を感じた。音楽をかけて体操をしたことで子供たちが楽しそうだった。

質問

- ①準備をしてから体操や運動などを行っていたが、安全性はどうか。
- ②課題設定は「ラリーを続けること」だったが子供たちの意識はラリーを続けることに向かっていたのか。

回答

- ①準備・片付けも含めて授業構想した。準備をどこに入れるのかも悩んだ。途中で準備を入れてしまうとボール操作をしている流れが切れてしまうことが気になり、連続的にできるようにした。安全性に気をつけて準備物を横に寄せるなどの工夫もできた。
- ②ラリーを続けることがこの運動の面白さと考えている。いかに落とさないのかをめあてに直結させることができればよかった。

田辺市 教諭

質問

- ①子どもたちの本時のゴールの姿はどのようなものだったのか。

回答

- ①前時は横並びが多かった。その中で、ボールを追いかけたために真ん中が前に出る児童が表れて、逆三角形ができた。本時では様々な形を無意識でなく意識して自分たちのチームのコートに落ちやすいところに配置することを考え、判断することをゴールとした。しかし、今回の授業では言語化（書く、話す）することができず、どこまで思考できたのかを評価しづらい。振り返りもさせたかった。

御坊市 教諭

質問

- ①ラリーを続けるということで、児童は片手でしていた。両手でするとやりやすいのではないかと、または、指導していないのか。

回答

- ①前時までにはボールの操作を練習してきた。両手の方がボールを操作しやすいということを話した。片手では難しいので、その分、移動してボールを取ろうという話もした。バレーボールでもアンダーハンドパスを使うので両手での指導をもう少し落とし込めたいと思えばよかったと思う。

橋本市 教諭

ラリーをするのなら、得点制ではなく、ラリーの回数をするチャレンジでもよかったのではないかと。

ラリーの練習をすることで、キャッチ・トス・アタックができるゲームになっていったのではないかと。



橋本市 教諭

質問

- ①学校内で系統についての話し合いなどは行われているのか。

回答

- ①ボール運動の領域でこれをするというものは決まっていない。跳び箱やマット運動では、系統を意識して取り組んでいる。ボール運動は系統立てて指導できていない。今回授業を構成していくときに、新しい指導要領も読むと、系統がさらに重視されており、研究主題も考えると、これまでの積み上げや繋がりが大切だと感じた。本校でも系統をまとめ6年間を通して児童を育てていくこと目指したい。

質問

- ①子供の運動量が少ないように感じた。45分の中のどこで運動量を確保しようとしたのか。
- ②目標と評価について、ねらいの一つである「体を動かしてボールを操作すること」の評価は指導案に掲載していなかったが意図することがあったのか。

回答

- ①運動量は準備運動と主運動につながる運動でとる。ゲームでも2、3分に1度回ってくる。コート の広さも迷った。今日の授業でできたのは3分ゲームが2試合と2分ゲームが2試合の合計10分 だった。そのため、主運動で考えていたよりも運動時間が取れなかった。
- ②指導案の書き方としては、思考・判断の部分だけ評価することになっている。指導案の書き方も様々 な書き方がある。1つが3つの目標に対して、主として評価するものを一つ選ぶ。もう1つは、1 つの目標を設定してそれを評価する。研究部とも話し合い、3つの目標から1つを評価する形をと った。どんな書き方がいいのかということは悩んだ。より伝わりやすい書き方があれば教えてほし い。

田辺市 教諭

新学習指導要領解説に指導計画の作成と内容の取扱いが掲載されており、各学年の系統性がまとめられているので本校ではそこを参考にしている。

運動量についてはウォーミングアップでもよくとっていたが、主運動のほうでなるべく取りたい。時間で区切るのではなく、役割分担の審判も含めたローテーション制にしてみたり、チームでの協力型のチャレンジ系にしてみたりする。



串本町 教諭

運動量の確保について、準備のしていない子にも運動の課題を与える。例えばなわとびカードをもたせてなわとびをさせる。

本時のめあてに向けて、メインのゲームの時間が少なかった。様々なチームと対戦することで相手チームの良いところを見て、それを試して修正する活動を増やしたい。主運動に関わる運動もよかったが削ることができる時間はしっかり削る。

3. 提案

古座川町立明神小学校は、児童数が12名の完全複式である。全校児童がバス通学で、放課後や下校後はほとんど外で遊ぶことがないという現状である。今年の新体力テストでは、跳躍力、持久力、スピードが課題としてあがった。持久力、スピードに関しては、毎年の課題としてあげられている。現状の打開を図るために週に2時間、全校児童による体力づくりの時間を設けている。企画・運営は、体育委員を中心に、新体力テストの結果をもとに年間計画を立てて取り組んでいる。本校は、少人数であるため、学級単位での運動内容にも限界がある。そのため、全校体育の時間を週に1時間設定することで、人数の確保や展開作り、他学年との交流も行うことができる。



単元設定は、本大会の研究主題とも関連してくる。今回は、全校体育「マット遊び」「マット運動」の領域で研究を進めることにした。低学年の「マット遊び」では、回転や支持、逆さの姿勢などの基本的な動きができるようになったり、遊び方を工夫したり、友達と教え合ったりする時間を設けている。中、高学年の「マット運動」では、技を身につけたり、新しい技にチャレンジしたりする楽しさや喜びを味わうことができる。

本単元に対して、半数の児童が苦手意識を持っていた。主な要因は、「体の使い方が分からない」というものである。本単元での運動の特性を捉えつつ、苦手とする要因を克服し、どの子も運動の楽しさや魅力に触れ、いきいきと活動する体育学習を目指すために、低学年では、「マットビンゴをしよう」、中、高学年では「マット運動の分析～教え合いから技能を高めよう～」と、めあてを設定し取り組んだ。学習の最初のオリエンテーションでは、全員で技の種類について確認した。下の2段、緑の部分で、低学年の技を紹介している。青とピンク、3～5段の所には、中高学年の技が紹介されている。低学年は、このように技を9つ選び、ビンゴカードを作るところから始める。学習中は、教師に技をチェックしてもらい、できた技に丸をつけてもらう。中、高学年は、基本技に加え、発表会までにできるようになりたい技を選んで練習していく。

今回は、全5時間設定で取り組んだ。毎時間、めあてと授業の流れの確認をし、「ねこちゃん体操」と「いろんな動き（どうぶつ歩き）など」を全体で行うところから始めた。場の設定は固定し、全校児童、教員で用意する。教員の配置や、児童の待機場所、教え合いカードの配置も設定している。教え合いカードに書かれた技のポイントを確認してから、演技者の手をつく場所を見る人、足を見る人、目線を見る人などの見るポイントの役割分担を決めている。演技後には、アドバイスをし合う時間を設けている。

場の工夫として、いくつか紹介する。「跳び前転」では、マットに2色のテープを貼り、手をつく場所の目安を設けた。「逆立ち」では、目線のポイントを置いたり、「後転」の回転力を補助する踏み切り板を使った坂道などを使ったりして取り組んだ。「側方倒立回転」では、高跳びのポールをゴムでつなぎ、たすきをつり下げた物で練習した。児童の身長に合わせて、長さの違うたすきをスライドさせてセットした。たすきを回転中に蹴るように指導した。ポイント練習の時間は、各自の課題に応じた場所で練習を行う。教え合いの時間に使った「教え合いカード」の裏面には、『この課題がある人は、この練習をしよう』と書かれており、それを基に練習場所で移動する。書く場所には教師がつき、児童の課題に集中的に指導していく。単元の最後には、全校児童の前で発表会を行い、振り返りを行った。他学年の前での発表会ということで、緊張感のある中頑張ることができた。



学習の振り返りアンケートの一部を紹介する。

- ・最初は苦手だったが、少しできるようになり、苦手な気持ちが減った。
- ・少し技が難しくなり、挑戦したい気持ちが増えた。
- ・友達との教え合いができてよかった。
- ・得意な友達や、上級生の技を見て、自分もやってみたいと思った。
- ・マット運動は苦手だが、ポイントを伝えることができるのを知れた。
- ・頑張ればできるようになることが分かった。
- ・動き方が「わかる」と「できる」ようになることがわかった。
- ・タブレットで動きも見られて楽しかった。
- ・もっとタブレットで動きを確かめたかった。
- ・前は得意だったが、今は少し技も難しくなり苦手。

技能面での振り返りをした児童もいれば、交流を振り返ることができた児童もいた。このことで、技能面で苦手な児童でも活躍できる場面を作ることができるということが分かった。

授業後の研究協議では、複式ならではの他学年同士の教え合いや、ICTの活用、場の設定の工夫や補助の仕方についての意見が挙がった。成果としては、「ビンゴカードの活用」や「教え合いカードの活用」。課題としては、「教師の指導の統一化」「補助の仕方の理解」「タブレットを使った動作確認の充実化」に努めることが挙げられた。

今回の研究から、基本的な技能の習得、教え合うことで役割を持ち満足感を得ること、さらなる高みを目指せるチャレンジ精神の育成、わかるからできるへのつながりの大切さを学ぶことができ、東牟婁郡の研究主題「運動の楽しさや魅力に触れ、どの子もいきいきと活動する体育学習を目指して」に迫ることができた。しかし、課題でもあったように、教師の指導の共通理解や、子供達が主体的に取り組める手立ての用意がさらに必要だと考えた。

手立てやICT、場の設定など、いろいろと教えていただきたい。
<質疑応答、意見、感想>

那智勝浦町 教諭

課題の中でICTの活用とあった。ipadを私も活用しているが、撮影するという学習よりは、参考動画(nhk for school)を流しておいて、子供が自分でできるポイントを見て活動するという扱いを中心に行っている。

質問

①今回の授業では、何台のタブレットがあり、どの学年が、どのように使っていたのかを具体的に教えてほしい。

回答

①明神では、タブレットが5台あり、高学年が中心に使っている。全校児童が撮影できるようにはしている。タブレットでその場で見ることもあれば、授業後に自分の動きをもう一度確認したいという児童のために、電子黒板にデータを移し、休み時間に自分の動きを確認し、次の授業に生かせることができるようにしている。また、このことを全校児童にも伝えている。

田辺市 教諭

人数が少ない中授業を行うことは難しいが、私自身は、高学年が低学年に教えることをやってきた。単式の学校に勤務場所が変わってからも5年生と2年生などのペア学年を決め、一緒に水泳やマット運動の授業をした。その際、5年生として、2年生に教えるとしたら、どこがポイントになるのかをしっかりと伝えることを目的としためあてを設定して授業を行っている。個人的には、効果があるように思う。

東先生の取り組まれていた、技の紹介カードや基礎感覚作りの運動・体操が参考になった。低学年の内に様々な感覚を身につけておくことで、高学年になってからの指導がスムーズになると感じた。

串本町 教諭

質問

①新体力テストの結果を踏まえて、体育委員が中心となり年間計画を立てているとおっしゃっていたが、内容は、先生がある程度選択肢を与えているのか、子供達が色々考えているのか、どのように決定しているのか。

回答

①低学年にもあった内容を提案したり、考えさせたりしている。具体的には、走る運動であれば「鬼ごっこ」や「3分間リレー」などを行っている。こちらから子供達に提案することもあれば、子供達の意見が現実的であると判断すれば、そちらを優先することもある。

4. 指導助言

全国体育調査の発表については、先生方のこのような良い取り組みを見ていると今年度もよい結果がでるのではと期待しているところでもある。近年は小中学校ともに、体力が向上してきているので、引き続き学校での体育授業、また、教科外の取り組みにつきましても、引き続き、お願いしたい。

本日は、指導助言にあたりまして、授業については先程の先生方の意見がそのまま改善点につながっていくのではと思う。私からは、少しお願いも含めた指導助言をさせて頂きたい。



新学習指導要領について簡単に説明を行うと、小学校については、来年度から完全実施となり、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善ということで、今回ある一定のアプローチを示されている。教師が、単元の中で主体的な学び、対話的な学び、深い学びをどう配置していくか。これが大変重要になっていく。それと、改訂のポイントに「運動嫌いを作らない」ということがあり、指導要領の解説は大変分厚いものとなっている。これを是非、教科書代わりに使って頂きたい。例示も内容も豊かになっている。運動が苦手な児童への配慮の例や、運動に意欲的な児童への配慮等載っている。その要因を取り除く手立て、また、すべての子どもが活動できる場、場面を保障していくことが、今後求められている。また、重要なのが体力・技能の程度・性別・障害の有無にかかわらず、運動やスポーツの多様な楽しみ方、「する、みる、支える、知る」の「知る」が今回追加されたが、知るための工夫をしていくということになる。中学校の課題としては、原則男女共修が求められていく。和歌山県については100%を目指している。

今日の講演の中で最後に出てきた「事故の防止と安全管理」であるが、先生方にも事故は防ぐことができる、防ぐ必要があるという意識をもって頂きたい。安全管理に関する十分な知識を教員一人ひとりが持って頂くこと、先生方だけでなく、子供達にもそれを指導し、安全に対する知識や意識を持たせることが大切になっていく。

来年度の実施に向け、中学年ではボール運動系の領域において、陣地を取り合うゲーム（タグラグビーやフラッグフットボールなど）を必ず取り扱うこととなっている。御注意頂きたい。未履修とならないようにお願いしたい。

本日の授業について、先生方の意見にもあった導入部分について、子供達は、普段の生活から動いているため、あそこまで丁寧にストレッチなどの準備運動をする必要があるのか。器械運動など関節の可動域を広げるためには柔軟は必要になるが、運動する前に静的ストレッチをすると、動きのパフォーマンスが低下してしまうと言われている。今日のように気温も暖かい気候なら、静的ストレッチを減らし、ボールを捕る運動など、動的ストレッチをどんどんさせていくとよいと思う。ただ、主につながる運動をさせるだけでなく、今回扱う、ネット型の特性をおさえていくことが重要になってくる。それが中学校、高校にもつながっていく。今回だと、「額の上でボールを捕る」や「腕を伸ばして挟んで捕る」など、狙いをもった準備運動をする必要があると思う。今回、個人的な技能の定着を図る目的が見られたが、バレーボールのような種目になると、集団的な技能が当然必要になってくる。指導案を見ると、子供達が経験しているのが、「バドミントン」「卓球」「テニス」ということで、個人に近い、さらに一発返し、またバドミントンを除いてバウンドありというスポーツを経験している。ただ、バレーボールとなると、チームで繋ぐということが必要になってくる。今日の授業のバレーは、ほぼ一発返しのバレーだったかなと思う。それでは、先生が今回狙いとしていたラリーを行うネット型の特性を十分味わえなくなっている。そんな時、教師が意図的にどういう風な条件をつけるか、どのようなルールでまずやっていくのかということが重要になってくる。その中で、コートの高さであったり、扱うボール、ネットの高さ、今日は若干狭かったように思うが、先生が児童の実態を把握した上で作られた場ということで、また、今後の課題として頂きたい。そして、子供達がラリーをどのようにつなげていったらよいかと考える場面があったが、先生が前時のゲームの様子を伝えて、そこから子供達が考えていた。そこで、前時のゲームの様子を伝え、まず、それを踏まえてゲームをやってみる、その中で今回こんなことをしてみようということが考えられることが必要であったと思われる。というのは、子供達があの場面で「考える手立て」がなかった。その中で考えてみようというのは、難しい。そのため、「じゃあ、まず1回やってみて。先生はその中でこんなゲームを展開していきたいんや。」と伝え、「じゃあ、どんな風にしたらいいんやろ。」と考えることで、思考・判断する時間を作る。子供を揺さぶる、めあてに迫る発問が大変重要になる。その発問から、子供達が思考・判断し、今もっている知識や技能をフルに活用し、課題の解決に取り組んでいく。そして、課題が解決できたとしても、また新たな壁にぶつかり、新たな知識が技能を習得していくという流れをつくっていく。

今日は、活動時間が少し少なかったかなと思っている。以前から数回授業を見せてもらい、児童の実態をよくわかっていた。フラストレーションのたまった児童をいきいきと動かせるテンポのよい授業をしていく必要があった。今日のような子供達は、動きたい一心なので、テンポよく動かしていく。研究授業だから計画通りにとらわれず、臨機応変に対応していくことも時には重要になる。

提案については、小規模の学校も多い。その中で少人数を指導するよさもあり、難しさもある。その中でいかに工夫していくかが大切。それは、大規模でも同じ事が言える。また、大規模、小規模それぞれ

れのよさをそれぞれの場で使うことができる。今回提案していただいた、異学年が教え合うことは技能差や年齢差をこえた中で授業を自然と展開できるよさがあると考え。ICTの活用は、ゴール型または器械運動系などで使い方によって効果を発揮する。学校の規模によって機器の差はあるが、機器が充実していったときには活用をしてもらえばと思う。また、ICTの活用に終始することなく、ツールはあくまでは補助、体育科における「する・見る・支える・知る」ことを助けるツールとして考えていただきたい。

来年度より、新学習実施要領が全面実施となる。時間が限られており、他教科もあることも十分承知ではあるが、学習指導要領解説を十分に理解していただきたい。また、各学年のつながりを教員が共通理解し、そしてそれを作成すること。体育科はつながり・積み上げが大切であり、それを切ってしまうと面白さがなくなってしまう。前学年で習ったことを活用でき、発展できる授業ができるように共通理解をしていただきたい。

各領域やその時の運動の特性を理解する。教材を教えるのではなく、ソフトバレーボールという教材を使って領域の特性や力を身に付ける。他の学校では、スパイクを指導しているところもあるが、スパイクを打つためにはつながりが必要であり、アタック＝スパイクではない。十分に子供の実態発達の段階に合わせる。そして、単元のゴールを明確にする。適切なレベルを修正していき、評価も合わせる必要がある。

体育の落とし穴は、活動あって学びなし。分かって楽しい、できて楽しい授業づくりをし、その中に学びがあること。主体的に取り組むためには技能、知識の習得がまずは必要である。

保健体育科がめざす資質能力の育成については、小中高で育成するものなので他の学校とのつながりを意識し、情報を共有する。

最近、運動経験が少ない児童が多い。様々な経験をしてきていない。そのために、体づくり運動の充実、運動の習慣化、授業だけでなく教科外での取り組みもお願いしたい。

小学校部会 (高学年)

研究主題

「運動の楽しさや魅力に触れ、どの子もいきいきと活動する体育学習を目指して」

ゴール型 (バスケットボール)

小学校高学年部会

会場 新宮市立王子ヶ浜小学校
授業者 石野 晃史 (王子ヶ浜小学校)
運営 川口 智史 (太地小学校)
司会 向井 康二 (熊野川小学校)
記録 溝口 誠也 (田原小学校)
尾原 佑紀 (西向小学校)
提案者 南 大樹 (神倉小学校)
指導助言 竹村 伸也 (新宮市教委)



研究協議

1. 授業者より

子供達が一生懸命頑張っていたのかなと思う。ボール運動があまり得意としていない子が多い。動き方がぎこちない子、スペースの動き方があまり分かっていない子。ダブルドリブルをする子、3歩以上歩いている子…。

子供達にはバスケットボールのルールはこうだよと教えているが、厳しくルールをとっていくと楽しんで運動することが難しくなるのではないかと、ルールにしばられて動きが小さくなったりすることも考えられるので、今回はセルフジャッジで、自分達で試合をしている中でそれはあかんということが出てこなければ大目に見るということをやってきている。

このバスケットボールは8時間計画になっているが、今回は作戦メイン。思考を働かせて授業していき、主体的対話的深い学びを目指して取り組んできた。

運動量やスキルの面はおろそかになっていないかということについては、「ドリルタイム」で基礎基本の習得する時間。「チームアップタイム」で自分達で立てた戦術を練習する時間にしてゲームという流れになっているので、運動量の確保は、まあまあできているのではないかと考えている。

今回、「ドリルタイム」で各チームばらばらの練習をしている。子供達のリーダーさんに準備運動カードを持たせていて、この裏に「ドリブル遊び」「シュート遊び」「パス遊び」がいくつか書かれていて、この中から今自分達のチームの中で必要な基礎基本を身に付けていく練習をしている。

「チーム分析表」というのがあり、クラス24人を4人ずつの6チームとして、チーム内の試合に出していない1人がつけるようになっているが、本日は3人が欠席だった3チームはつけられていない。

思考を働かせるということで、「個人カード」「チームカード」を工夫して取り組んだ。

まだまだ体育の授業に関してはわからないことがあるので、みなさんからいろいろなアドバイスをいただけたらと思う。



2. 質疑応答、意見、感想

海南市 教諭

苦手な子に注目できたらいいと思っていた。なわとびをしたとき、ひじから回していたAさんを1時間見させてもらった。はじめの練習の時に、Aさんはボールを味方からもらうのに、味方のボールを見るのに必死、同時に空いているスペースを見つけるのに必死で一生懸命走り回っていた。ボールを投げられたときに、ちょうどスペースの方に目がいってボールが取れないことや、スペースのところに行かなければいけないのに、ボールに目がいって上手くスペースに入れなかったことがあり、授業の前半に困っ

ていた。1試合目が終わった後に、同じチームの子が「Aさんへパスを出すとき、パスが失敗するよね。」と、どうしたらいいかチームで作戦を立てていた。最終的にそのチームが立てた作戦が「同時にパスをもらいにいく」という作戦だった。Aさんは2回目の試合で、実際にその作戦でうまくいき、パスをもらえるということがあった。Aさんにとってバスケットが楽しくなった時間になったのではないかな。見ていてうれしくなる時間だった。

質問

①先生のめあての中に「チームの良さを生かした作戦」があったが、実際チームで話し合っていたことは「失敗したことをどう解決していくか」に焦点が当たっていた。チームの良さを生かした作戦とは、例えば「背の高さを生かして高いパスを出す」とか、「肩の強さを生かして、遠くへパスを出す」といったことが考えられるが、そういった話し合いは行われていなかった。他チームの作戦も含め、チームの良さを生かした作戦とはどういう考えで取り組まれていたのか。

回答

①チームの中で苦手な子が絶対にいる。苦手な子がいる中で難しい作戦を立てても、その子が辛い思いをするだろうし、戦術的としても上手く機能していかないだろうと思っている。個人個人のできることを良さとして、チームの中で戦術を立てていくことも含めているが、今回のAさんの「パスが通りにくい」ということから、Aさんの苦手な部分をチームの中で見つけて、どうしたらAさんの良さを見出せるのか戦術を立てていけば、自分としては良いと感じていた。

和歌山市 教諭

自分もセルフジャッジにすることが多い。クラスの雰囲気は温かいなと思った。1時間を楽しく見させていただいた。カードが丁寧に書かれていた。舞台側を見させてもらったときに、「この子、全然ボールを触れていないな。」と思うKさんを見ていた。作戦カードのところで自分たちがどうやっていくかをチームで確かめていたので「今日はこの子、触っていけるだろうな。」と思っていた。実際、チームの子がうまくボールを回して、とてもいいなと感じた。シュートにいける場面でもKさんにパスを出している場面もあった。3on3で、子供達がカードを使って動きがわかりやすかったのではないかなと思った。思考したことを体現しやすかったのかなと思った。振り返りの個人カードを貼るというアイデアが良かった。

質問

①個人カードを貼る意図について。

回答

①チームで振り返りをするためには、個人の振り返りが大切だと思っている。本なども参考にしながら、試行錯誤をして作った。

紀の川市 教諭

黒チームに注目した。女の子二人がやる気があるためにボールに行ってしまう、オフェンスでもディフェンスでも男の子がボールを持っている同じ方向に動いてしまう傾向があった。先生がそのチームの課題が何かを聞いていた時「スピードに緩急をつけたらもらえる」と言ったが、自分はそこは課題ではないと感じていた。先生もそう感じていたのではないかなと思うが、あえてその場では言っていなかったように思う。



質問

①黒チームへにはどのように関わっているのか。

回答

①黒チームは男の子が中心になって進めている。女の子も自己主張が強い。話し合いがされているので、女の子の二人とも近づいていくのもチームの作戦だと思っていた。黒チームは強すぎたので、サポートはあえてしていなかった。

運動量の確保をすごくされていると思ったが、試合の間々に話し合いが多く取られていた。話の内容が1試合目と2試合目と同じなので、ひとつカットしてゲームを組んであげるとより楽しくなるのではないかなと感じた。

質問

①単元構成を見ると、最後にオールコートで行うと書かれていた。なぜ最後の8時間目だけオールコートなのか。コートが広くなれば、パスももらいやすくなったり、動き方も多くなったりして、違う楽しさもあるかなと思うが。

回答

①僕自身は最後まで3on3でも良いと思っている。バスケットは5対5のオールコートのイメージ。ボールをもらえない子が5対5では出てくる。オールコートで、攻守の切り替えがはげしいと、戦略が生かせられないのではないかと考えていた。3on3にし、攻守をはっきり分けておくことで、作戦を立てやすいと考えた。子供達にはバスケットは体験させてあげた方がいいのではないかという意見もあり、最後の時間にオールコートを経験させてあげたいと考えた。

田辺市 教諭

落ち着いた授業だった。先生がどんな場面で子供達への声かけをするのか、指示をどう通すかを見させてもらった。先生の指示として、子供達が集まった時に「もっと広がりよしよ。」と、的確な指示をされていたと思う。全体で指導する時に「集合」の声で、一気に集まってくる。普段からの先生の取組、子供達との接し方の積み重ねがあるのではと感じた。



質問

①チームはどのようにして決めたのか。教師がチームの力に偏りがないように決めてしまうと、どうしても上手い子が中心となって上手い子ばかりのゲーム展開になってくると思うが、今日の授業ではそういった場面は見られなかった。ボールに全員触れていた。作戦シートが有効だったのか、もしくはそれ以前に先生からの働きかけがあったのか。

回答

①どんなことでも児童が自分達でするシステムになっている。席替えも給食もチームも自分達で作る。それが特別なことではなくなっている。主張の強い子がやりたいようにやるように思われるが、それが無い。チームを決める際にも自分が「この1チーム、力偏ってるかな。」と思っていると、子供達が「ここちょっと強いんじゃない。」「そうか、じゃあどうしようか。」と、自分達で声をかけあって進めて決めていた。体育に限らず、普段の授業も子供達が進めている。自分からの声かけとしては、「今回の学習では、作戦を大事にしていってね。作戦を立てる上で、どうやったら3人でボールが回せる試合ができていくのかを考えていってね。」と、子供達と応答しながら進めた。

御坊市 教諭

子供達が自分達で動いていて無駄な時間が一つもない。子供が中心になって動いている授業だった。

質問

- ①途中で活動を止めて「スペース」の話があったが、もともと授業の中で伝えるつもりであった先生の意図だったのか、今日の子供の動きをみて思ったのか。
- ②評価でチームの特徴に応じた作戦を立てていることを評価規準とされているが、子供達の特徴をとらえての評価なのか、各チームの作戦を把握されての評価なのか。

回答

- ①舞台側で試合をしているチームと体育館入り口側で試合しているチームとで、同じ現象が見られた。3分間の試合の中で「ここ」というところを抽出して、毎回指導している。今回は、同じ場所に2人いて、一方のスペースが空いているのに見つけられていないという現象が起こっていたので指導をした。バスケットの中で起こりうる現象を考えられることを思い描いておく。あらかじめ自分で考えておくことはしている。
- ②チーム練習の時に、作戦カードを見て把握を行った。子供達の作戦は完璧に把握できているわけではないので、カードに書かれている作戦と試合を見ていきながら評価をしていきたいと思う。完璧には評価できていないかもしれない。

和歌山市 教諭

黄色チームを見せてもらっていた。黄色チームの目標は「パスのミスが減らす」、パスを慎重にすることを課題として取り組んでいたようだ。後の感想では、課題は上手くいかなかったみたいで、「シュートを打つところまでいけていないと言っていた。でもシュート率は高かった。」という反省が出ていた。前の課題と同じになったということだった。一生懸命考えているチームだと思ったが、次の活動にどうつなげていくかが大事だと思う。



質問

①自身は、今回バスケットでは「パスの大切さ」や「攻め方守り方を分けて考えてすること」が大事であると感じたが、先生はどういうことを身に付けたら、子供達がバスケットが楽しい、バスケットの面白さがわかる、バスケットの力が付いたと考えているか。

回答

①大事にしているのは学級作り。仲間がいてこそ楽しい。4月の学級作りで支え合える、励まし合える、お互いが切磋琢磨し競い合える、いい環境作りが一番大事だと思う。今回のバスケットでは、シュートが入ったら楽しい、パスが通ったらうれしい、マークを外してスペースを見つけられることができた、といった個人個人の楽しさもあると考えている。苦手な子も楽しめるということで、作戦通りに動けることが楽しいと思っている。スキル面で難しい子も、作戦通りに動けていると喜びにつながると思う。今回は作戦を立てた動きができた楽しさ、うれしさを意識した。その中でスキル面も身に付けさせて、達成感も味わわせることも大事にした。

有田市 教諭

言葉の短さ、教師のしゃべりの回数の少なさ、見事にコントロールされていると感じた。先生の声のトーンも押さえて、子供の対話が引き出しやすいように心がけられていた。

質問

①振り返りの評価のときに、一つのグループにささやかれていた場面があったが、その意図は何だったのか。先生の学級経営が表れていたのではないかと思う。

②次時の課題は何か。

回答

①この時は、運動が苦手な子に褒めていた。周りに聞こえるように言うと、どうしても「なんで、この子だけ。」という気持ちにさせてしまう。運動が苦手な子だけに聞こえるように言うと、その子にとってよいのではないかと思った。

②次時は、違うチームとの試合になる。前回のチームで立てた作戦が通用するか、また、通用しない場合はどうするかということで、新たな作戦を立てることがねらいとなる。最終的に全ての作戦を活用させる流れになっている。1時間1時間、新たな作戦、できなかった作戦をもっと深めていき、最後の8時間目に臨んでいきたい。

3. 提案

神倉小学校は東牟婁郡で一番大きな学校である。全校で運動を行う時間はとることが難しく、学校における体力向上という面では、各クラスの体育の授業に重きを置かれている。

児童の実態としては、地域のスポーツ少年団でいつも運動をしている子から休み時間等、普段から全く運動しない子もいる。子供の体力差、能力差は体育の授業を行う際に非常に大きいなと感じる。

バスケットボールでどのような工夫をすれば楽しくなるかという基本的なところをテーマに取り組んだ。バスケットボール



ルールや作戦を工夫して、集団対集団の攻防によって競争することによって楽しさや喜びを味わう

ことができるものです。その運動特性を感じることができるように、普段から運動する子と運動が苦手な子が楽しさを感じながら取り組めるような授業づくりを目指すこと、また自分の取組が他の教員と共有することができればよいと感じ、単元を設定した。

取組のポイントは6つある。

- | |
|-----------------------|
| ①神倉小学校全体で取り組んでいる準備運動 |
| ②基本的な運動に対しての取組 |
| ③児童が楽しみながらできる運動 |
| ④動きの質を高められるような環境の工夫 |
| ⑤活動にゲーム的な要素を取り入れること |
| ⑥ゲームのルールを少し工夫することの大切さ |

を提案する。

【①について】どの学年も同じ内容で準備運動ができないかと考えた。和歌山県が推奨している「紀州っ子がやきエクササイズ」にどの学年も取り組み、1～3年生は入門編、4～6年生は発展編に取り組んで、授業の導入に活用している。児童にとっては、学年が上がっても同じ運動をするということもあって、自信をもって取り組む姿が見られる。また、準備運動だけでなく、体力の向上につながる全身を動かす動的ストレッチとしても、柔軟性を高めながら運動前の準備に最適な状態を作り出すことにつながっていると感じている。

【②について】どの種目においても基礎的な動きを習得していないと次の段階でうまくいかないことが多い。バスケットにおいてもボール操作をしながら、ドリブルやパスができることが大切である。基本的な動きを一つ一つ確かめながら行うこともあるかと思うが、自身の授業では、音楽をかけながらリズムによって様々な動きに取り組んでいる。曲の中では、ボールフィーリング、パス、ドリブルをする場面がある。まだまだうまくできない児童はいるが、児童がリラックスしながら、音楽によって楽しみながら運動する姿が見られている。ペアとの関わりを通じて、受け取りやすいようにパスを出したりするなど、基本的な動きだけでなく、仲間同士で励まし合ったりする様子が見られる。(映像を視聴する)

【③について】オリエンテーションではバスケットボールのルールを学んでいる。そのルールの中で、相手にボールをうばわれないためにはどうすればよいか、またどのようにしたらボールを奪うことができるかをドリブルリレーやドリブル鬼ごっこといった活動を通して学べると考えた。ペアを変えてみたり、秒数を決めて最後にボールを持っている児童にペナルティを与えたりするなど、児童が意欲的に取り組めるような工夫を行った。スピードパスは、同じ場所でボールを交換するのではなく、動いてボールをもらおうといったバスケットボールの基本的な動きを習得するために取り組んだ。パスを出した人は必ず空いているフープに移動し、どれだけ早いパス回しができるかという取組である。初めは、混乱しないよう、フープの数を少なくして取り組み、徐々に数を増やし、いろいろな動きの中でパスができるように取り組んだ。

【④について】ボール運動の時は、ボールを持つときの動きとボールを持たない時の動きに分けられる。シュートを決めたいが、やみくもにシュートを打つのではなく、シュートが入りやすい場所に移動することが大切である。授業では、フープをシュートが入りやすい位置に置くことで、その示された場所まで動いたときに、友達からパスをもらい、シュートをする練習を行った。最初はスムーズにいかない場面もあったが、要領を覚えてくるとパスのスピードが上がったり、バウンドさせたりするなど、少し変化も加えながら行った。まだまだ正確にシュートが入るといことは難しいが、ボードにはった目印に向かって、シュートをする様子が見られ、ゴールした児童がとても喜ぶ姿が見られた。上手な児童のシュートの様子をビデオにおさめ、授業の中で児童と共有するなど、ICT機器を使用したことも児童の意欲向上につながっていると感じる。

【⑤について】子供達はゲーム的な要素を好む。単なるシュート練習やパス練習の反復ではなく、「時間内に何本のパスが成功できるか」という課題を設定する。他者と競い合うこと、個人ではなくグルー

プで競い合うことを動機づけとすることで、児童の意欲が向上した。また、グループの一体感も生まれ、自分のグループが上手くいくために仲間へ声をかけたり、上手い児童の様子をしっかりと見たりする行動が出てきた。(映像視聴) 児童は、リングにシュートを打つのは初めての段階。自由にシュートするという設定もあるかと思うが、走る位置、ボールをもらう位置などある程度設定しておく、練習がスムーズに行えていたように感じる。スピードパスも3人で4つのフープにすると、移動が簡単であるが、フープが6つぐらいになると、移動が難しくなってくる。フープの数を4つ、5つ、6つと少しずつ段階を踏んでいくと上手くなってきた。

【⑥について】ゲームはオールコートで取り組むと、どうしてもたくさんの児童がゴール前に集まりすぎて、スペースがなくパスが通らなかつたり、ゴール前にボールを運んでもシュートが打てなかつたりしてゲームがうまくいかなかった。そこでサイドラインを自由に動くことができ、なおかつフリーでボールをもらうことができるサイドマンという役割を各チーム両サイドに二人設置しゲームをした。コートの中にスペースが生まれ、パスが通りやすくなつたり、ドリブルがしやすくなつたりして、ゲームが楽しめるようになった。シュートについても、決められたゾーンに入ることで誰にも邪魔されずに、シュートが打てるというルールを付け加えることで、邪魔されずに落ち着いてシュートを打つことができるため、多くの児童がシュートを打つチャンスが生まれた。入った時は、個人やチームで喜ぶ姿が見られ、全員ではないが、多くの児童がシュートを成功させることができた。(映像視聴)

【成果について】どの活動も、ほとんどの児童が生き生きとバスケットボールに取り組む姿が見られた。児童から「今日のバスケットは何をするの」「早くバスケットがしたい」という声がたくさん聞かれた。毎回の授業が良い雰囲気の中で行うことができた。ゲームを楽しむための技術の習得に工夫をした。最初はうまくいかない場面もあったが、教師や友達の動きを見本にしながらいき強く続け、目印を活用してシュートが決まって喜ぶ児童がたくさんいた。様々な授業の工夫が児童の技術や意欲の向上につながったと感じた。

【課題について】実際のゲームでボール操作が上手くいかずに、つまらなさそうにしていた児童もいたことは事実としてある。小学校段階で技術習得ばかりに目を向ける必要はないかもしれないが、最低限これだけは身に付けさせたい技術を、体育の時間の中で経験、習得させておく必要があると感じた。これらの経験が中学校や高等学校の保健体育の授業に生かされ、生涯にわたって運動に親しんだり、健康や安全に生きていくのに必要な力であると思う。今後も全ての児童が運動することに楽しさを見出せるような授業づくりに取り組んでいきたい。

4. 指導助言

東牟婁地方では本年度の研究テーマを「運動の楽しさや魅力に触れ、どの子もいきいきと活動する体育学習を目指して」とし、新学習指導要領に示されている主体的・対話的で深い学びを通して、子ども達が自分でめあてを持ち、苦手な子でも運動の楽しさを味わえる体育学習について研究を進めてきた。神倉小学校の研究提案、王子ヶ浜小学校の公開授業は、その成果が表れていた提案及び授業だったのではないかと感じた。

王子ヶ浜小学校の授業では、子供達が落ち着いていて主体的に考え動いていたと思う。体育のその時だけ取り組んでも、このような結果は出てこない。日頃からの学級作りやその他の

の取組の成果であると思われる。午前の講演でもあったが、運動能力の高い子が、運動が苦手な子をどれだけ引き上げていけるのかというあたりについても、子供達の話し合いや活動の中で、そのような姿が見ることができた。得意な子がはばを利かす姿もなく、子供達が自分達で考えながら行動し、できていた授業であったと思う。子供達が主体的に活動する中にも、先生が意図を持って入っていく部分もよく考えられていた。今後に向けて、子供達が作戦を意識して、ゲームの中に活かしていけるように支援



をしてほしいと思う。バスケットボールに限らず、球技の場合は作戦を立てるが、その場その場の対応も必要になってくる。ゴール下にいるにも関わらず、作戦通りにパスを出してしまうといった「ゲームと作戦が切り離されてしまうこと」がないような授業展開ができればと思う。今日の黄色チームの振り返りように「前回こうだったが、今回はこうだった」といった課題の連続性も大事にしてあげてほしいと思う。最後に、クールダウンのときには、けがの確認をしてあげてほしい。けがをする子どもの数も増えてきているため、こういったことにも配慮をしてほしい。

神倉小学校では、学校、学年、学級で行う体育の課題について明らかにされて取り組んでこられた。和歌山県においても運動の得意な子と苦手な子の二極化が進んでおり、神倉小学校も同様の傾向にある。ゲーム的な要素を取り入れたり、意欲的に動ける課題の提示など、様々な工夫が見られた。ルール工夫については、小学校の体育では、子供達の姿をもとに、意図を持ってルールを工夫することも必要である。その際、種目固有の特性にも配慮しながら考えてほしい。今後への期待として、全校で行う体育的な行事についても検討してもらいたいと思う。一つの案としては「きのくにチャレンジランキング」への取組である。みんなでなわとび等の種目を体育集会的に行うと、子供の意欲を高めつつ、子供の運動能力アップ、体を動かすことに結び付けてもらえたらと思う。新学習指導要領に沿っていくなれば、主体的・対話的に取り組む姿を意識して、子供達自身が考え、話し合っ、高め合える授業づくりをしていく。そのためには要点がわかる資料やICTを活用した活動に今後も取り組んでほしい。

今後も和歌山県の子供達一人一人がよりよい授業に出会い、運動への意欲が高まるよう、体育の授業研究を進めてもらえたらと思う。本日出席された先生方が日々ご尽力いただく中で、体育の授業がより一層充実し、子供達の明日の姿に生かされていくことを期待している。そのことが学習指導要領にも書かれている「生涯にわたって健康の保持、増進と豊かなスポーツライフの実現」へとつながっていく。

中学校部会

研究主題

「『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業の工夫」

球技（ネット型） バレーボール

中学校研究部会

会 場	那智勝浦町立宇久井中学校			
授業者	塚 勝 (宇久井中学校)			
運 営	橋本 紀彦 (緑丘中学校)			
司 会	得津 翔平 (太地中学校)			
記 録	岡橋 友美 (那智中学校)	畠 敏紘 (光洋中学校)		
提案者	角 利則 (緑丘中学校)			
指導助言	橋爪 信也 (県教委)			

研究協議

1. 授業者より

本時バレーボールでこの時間の一番のねらいは、子供達の話し合いや、いろんな子供同士の関わりをどのように増やしていくかを通常の試合の中でどうやって生かしていかをメインに、前時から本時にかけて行っている。

普段の生活の中で、子供達の様子は元気でありコミュニケーションをとるのは活発ではあるが、もっと上手にコミュニケーションをとれるようになって欲しいと思いつつ、日頃から授業を行っている。今日は、授業の開始時間が少し早まってしまい、実質 54 分の授業となってしまったが、活動としては毎時間活発に行っている。ただ、活動の中身として色々なことを考えながら行っていけるよう、こちらからも仕掛けているが、子供達の中で考えが深まっていけるように、本時の授業につながるよう計画してきた。見ていただいて、改善点等御指摘していただけますよう、よろしくお願ひします。



2. 質疑応答、意見、感想

【質問】

生徒の授業が始まるまでの様子や、ウォーミングアップなどで自分達でボールを使ってやっている様子など活気があり、意欲的に運動を行う子供達であると感じました。本時の授業の中で、「スペースにボールを落とす方法を考えよう」とありますが、本時の目標の中で攻撃側、守備側に分かれてアタックする回数であったり、落とす方法を考えたりする中で、どのような話し合いの活動になっていけばよかったのか教えて下さい。

【回答】

生徒がどのような話し合いをしていたかについて、授業を計画していくうえで、相手コートにスパイクを打ち込むためにどうしなければいけないか考えさせた。また、そのためには打つだけではなく、相手コートを見なければいけない。打ったボールをレシーブされないようスペースを狙って打てるかなどの話し合いが子供達に出ていた。また、より高い点数を狙うためにどのように攻撃するか、3点取るためにどうしなければいけないか、スペースをどのように狙うか、子供達としてはそこに意識を持ち練習させてきた。本時までにもスパイク練習の時間を少し長めにとっていた。その中でヒットする感覚を身に付けてこられたが、本時ではスペースを狙うという目標については100%達成できてはいなかった。今後の課題として取り組んでいきたい。

【質問】

本時の目標でスペースにボールを落とすことを考えることができるようにしよう、とありますが、思考判断の評価と考える。本時のめあての「めざせ石川選手」というところでの評価は技能と考える。この違いと、どっちに重きを置いているかを説明して欲しい。もう一つはねらいを定めてスパイク打つということですが、スパイク練習ではどこを狙っていたのか。



【回答】

スペースを狙って落とすということでは、普段からもどこに落とせばいいかを考えさせて練習させてきた。スペースを見つけられるようになってゲームの中で活かされるように心がけた。また、スパイクを打つ時に、石川選手のプレーをイメージさせたいと考えた。

【質問】

攻撃側がスパイクを打つ際、守備側にブロックをつかれた際はどこに落とせばいいのか、スペースを狙えるのか。バレーボール経験者であれば可能であるが、打つことに精一杯の生徒の場合は難しいのではないかと。また、スペースを狙う方法としてはフェイントでも可能ではないかと。

【回答】

得点を考えて攻撃する時に、スペースを狙う方法の一つとして生徒達からフェイントもあるのではないかと考えさせた。本時の授業の中でも得点を考え、スパイクを打つのかフェイントをするのかを話し合い、生徒達からどちらを選ぶか考え、出されることを期待していた。形としてはできていないが、生徒達の中できっかけになり、今後の授業の中でも考えさせていきたい。また、ねらいを定めてスパイクを打つことは少し難しいところもあったので、今後もマーカーを置くなどの工夫をしていきたい。



【質問】

活動に参加しづらい生徒への働きかけについて。

【回答】

生徒達が中心となり、話し合いや声かけをして活動できるような仕掛けや、きっかけを作っている。

これまでの授業では、ペアで練習をしたり、少人数のグループ練習を取り入れてきた。また、どの生徒同士でも活動できるようにペアの組み合わせを変えている。苦手な生徒もいるため、できそうな簡単な練習をお互いに協力してできるよう工夫してきた。

【質問】

本時の振り返りのなかで、個人の振り返りがなかったがどのように振り返りをさせているのか。

【回答】

本時ではチーム内で次につながる話し合いがたくさん出ていたため、チームでの話し合いに時間を多く使った。個人の振り返りでは、ファイルを持たせているので、時間のある時など、次の時間までに書かせる方法をとっている。

【質問】

授業の中で足を使っている場面があった。バレーボールは足を使っても良い競技であるが、安全面への配慮はどうしているのか。

【回答】

足を使っていた生徒はサッカー部で、どうしても手より足の方が先に出てしまう。指導としては、足を使っはけないと指導はしていない。ただ、手で操作する方がボールを扱いやすいという指導はしている。

【質問】

授業では苦手な生徒やうまく出来ない生徒も大切にしたい。得点など工夫されている授業であった。話し合いの時間と活動の時間の両方を 50 分で行うことは難しいことと考える。



【回答】

技能、思考・判断両方を同時に伸ばすのは難しい。本時の授業では、活動時間がやや少なかったが、考えることや話し合いの時間を多めにとっていった。生徒が動き方を身につける、考えることも意識させた。運動には、やりながら覚えるということもあり、考えばかりでもうまくいかなしい、考えずに活動してもうまくいかなしい。どちらもバランスが大切であると考えた。普段の授業では、自分達がなぜその動きを選択したのか、時折生徒に投げかけている。考えずに動くと上達は難しい。何を考えて、それを自分の動きに当てはめ、選択するが大事である。

【質問】

評価の仕方について悩んでいる。特にグループを作ったときにどの様に評価するか。生徒が最終的にどんな言葉をかければ A 評価なのか、どんな言葉かけで B 評価なのかをどう考えられていたか。

【回答】

評価については技能面だけでなく、思考・判断を大切にしていきたい。話し合いの中で、守備側であれば、どうやって相手の攻撃を防ぐかを話し合っているか。攻撃側であれば、どうやって 3 点を取ることが出来るかを話し合っているか。自分がチームメートのことを理解しながら話し合いが出来ていればよいと考えている。



3. 提案・発表

(1) 東牟婁地方中体連 取組の成果と課題について

平成 27 年度から、今年度の学体研にむけて若手教員、中堅教師、ベテラン教師と授業研究を行い、授業力向上を図る。平成 30 年度の取組ではワークシートを持ち寄って検討、改善、作成を行った。課題としては生徒の体力、運動能力の低下、運動機会の減少など。知識理解、授業作り、地域との運動の機会、関わり。中堅教員の減少。今後の人材育成についても課題となる。また、教師主導の一斉授業からの脱却。生徒同士での学び合いや教え合い、話し合い活動を通して導きだす授業を作っていく。

(2) 研究テーマについて

研究テーマ「主体的・対話的で深い学び」

研究の過程、アンケート調査を行った。ワークシートの研究や、グループ活動についての 3 月の研修会でワークシートについての研究会を行った。研究テーマにつながるワークシートを持ち寄った研修会を行った。ワークシートありきの授業ではなく、生徒が困っていることや、生徒に合わせた授業作りを目指していることを一番に考えワークシートを作成した。特別支援の生徒についてもみんなで課題を考え、授業作りを行った。生徒同士、生徒と教師の関係なども考えて研究協議を行った。授業計画を立て

ながら、指導案を検討する。ポイントとして生徒達のつながりを大切にし、生徒主体の授業にしたい。そのため、話し合い活動を組み込むことになった。

今回の授業での反省をこれからも生かし、一番大切にしたいことは生徒が生き生きと活動できる授業をどう組み立てていくかを考えてきた。

当地方の研究と、本日の授業の発表が皆さんのこれからの授業作りに役立てれば幸いです。本日はありがとうございました。

4. 指導助言

【新学習指導要領に向けた取り組み、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業実践について】

中学校では令和3年度より新学習指導要領が全面実施される。保健分野では3年生の学習内容が一部2年生に移行していることもあるので、必ず移行措置を踏まえた計画をたて、授業をしなければならない。保健体育の授業で最も大切にすることは、新学習指導要領の今回の改定の要点でもあるが、豊かなスポーツライフの実現のために、スポーツを通じた共生社会を推進していくような人材の育成である。主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善。教師が意図的に主体的・対話的・深い学びを単元の中にどのように配置していくか。知識・技能の資質・能力の育成では、学習内容が本時までの既習事項、今までなかった事項との関連を把握できるように、そしてそれを活用できるような支援をする。学習する生徒に対し、自分の課題はどこにあるか、必然性を持たせることが重要。振り返りの時間の確保、学びの成果と課題の自覚を持つことが大事である。

評価基準についての研究。観点別学習状況評価の観点が3つの柱に再構成。主体的に学習に取り組む態度では2つの側面。粘り強く取り組む側面と自己調整を行いながら取り組む側面。この2つの側面を見て評価をするということが研究されている。振り返りにより自分の学びの成果、課題を自覚することが大切である。主体的に学ぶ、既習事項との関連付け、生徒に必然性を持たせるために振り返りの時間が大切である。

運動嫌いの児童生徒を無くそう。豊かなスポーツライフの実現に向けた児童生徒の育成を目指す。共生の視点。体力や技能の程度、性別や障害の有無等に関わらず、運動スポーツの多様な楽しみ方、関わり方を学ぶ。男女共修について。

指導と評価の一体化について、指導したことを評価する。評価は生徒の学習改善につながる。教師の指導改善につなげる。授業では指導計画の後半のテストのみなどで評価するのではなく、それまでの学習の全体の流れやバランスを考えて評価をし、改善につなげる。自分の指導方法、説明方法、気付かせ方の発問の仕方など、教師の指導改善につなげる。

【本時の授業について】

本時までの準備や研究をしっかり進められていた。アップではランニングに工夫が入れられており楽しみながら始められていた。

ネットの高さは共生の視点に立って設定する。みんなが参加できることを重視する。苦手な生徒の存在やその状況を受け入れることが共生となる。ネットの高さは生徒の実態を考えて設定する。個人での振り返りの時間は必ず入れること。学習したことを振り返ることで主体的な学びにつなげる。

東牟婁地方研究部の提案の中にあつた、ティーチングからコーチングへについて。コーチ (Coach) とは、大切な人を、その人の望むところまで送り届ける様々な営みに由来。授業で生徒にどのような力を身につけさせられたか。

【今後のお願について】

- ① 体育授業での事故防止、安全管理の徹底。
- ② 運動部活動の改善、改革の意識を持って取り組むこと。適切な休養、活動時間など計画を立てて指導を行うこと。
- ③ 体罰等、不適切な指導の根絶
県内でも体罰事案が報告されている。パワハラやセクハラなどの言葉遣い等に気を付け、適切な指導を行う。

高等学校部会

研究主題

「主体的に取り組み、課題の発見・解決を目指す健康で安全な体育授業」

体づくり運動

高等学校部会

会場 和歌山県立新宮高等学校
授業者 丹羽 泰一郎 (新宮高等学校)
運営 下平 崇弘 (新宮高等学校) 中野 亮 (新宮高等学校)
司会 藪 中 (新宮高等学校)
記録 勝山 真葵子 (串本古座高等学校)
提案者 丹羽 泰一郎 (新宮高等学校)
指導助言 安藤 慎介 (県教委)

研究協議

1. 授業者より (新宮高等学校 丹羽 泰一郎)

今回のような「体づくり運動」の授業は昨年より継続して実施している。今年度の授業を計画するにあたり、生徒への事前アンケート（運動が好きかどうかや中学校での体づくり運動の内容などについて）を実施し、その回答をもとにねらいを立て、授業を計画した。授業（全7時間）は導入の2時間を教師主体で進め、3時間目以降は生徒主体で行うよう計画した。授業のねらいは「対話的」「男女共習」を柱とした。教具にホワイトボードを活用し、目標や取り組み内容等を毎時間書き出させ、明確に理解できるようにした。また生徒には「振り返りシート」への記入を通じ、本時の取り組みを①Good ②Bad ③Nextの3項目で反省させ、次時への目標を立てさせた。運動嫌いな生徒もいたが、男女共習で楽しく学べたという感想もあり、一定の成果はあったように思う。課題としては、今年度から本校の授業時間が45分に短縮されたこともあり、運動量が減ったことによる物足りなさを生徒が感じていることが挙げられる。

2. グループワークでの意見交換

①グループ：参観していただいた先生を2グループに分ける

②方法：付箋紙に良かった点、悪かった点等を書き出し模造紙に貼る。
貼り出された意見をグルーピングし、「成果と課題と次の一手」にまとめグループ毎に発表。

グループA 鈴木先生（笠田高校）、吉田先生（那賀高校）
三谷先生（田辺工業高校）、西畑先生（有田中央高校 清水分校）

成果

- ・ケガの有無の確認など生徒同士で確認できていた。
- ・身体活動を男女共習で実践できていて良かった。
- ・生徒同士でルール確認をすることによって思考判断につながっていた。

- 課題
- ・次の行動に移るまでの時間がかかりすぎている。
 - ・グループでのゴール設定を最初の段階で明確にすべき。
 - ・ルールをホワイトボードに書き出すことにより、言語化できていたが、全員がルールを十分に理解できていなかった。実際に見本を見せるなどをして、全員にルール理解をさせたほうがいいのではないか。

グループB 那須先生（神島高校）、木村先生（きのくに青雲高校）
井上先生（東陽中学校）、畑中先生（近畿大学附属新宮高校）

- 成果
- ・男女共習で主体的に活動できていて素晴らしい。
 - ・発表者に注目し集中して授業に参加できていた。
 - ・活動の中でルールの追加、ペナルティの追加など発展させていたのがよかった。

- 課題：
- ・発表者の声が小さく伝える力が弱い。
 - ・生徒同士ぶつかる場面があり安全面が気になった。
 - ・ルールの説明やコミュニケーションを重視すると運動量が減り、逆に運動量を増やそうとすると対話時間が減るなど相反する課題はある。
 - ・次の一手として、運動を提案するグループの「先生化」をすればいいのでは。

授業者より（新宮高等学校 丹羽 泰一郎）

様々な御意見をいただき、大変参考になった。今年度から授業時間が短くなったことで、授業のどこに重点を置くか大いに頭を悩ませた。発表するグループ数を増やすべきか、または同じグループを2周、3周と内容を改善しながら発表させるべきか等について検討した。今後は本日の御意見を参考に授業改善に努めたい。

【グループワークの様子】



3. 指導助言

学習指導要領では「体づくり運動」の領域においては「体を動かす楽しさや心地よさを味わう」と「健康の保持増進や体力の向上」という目的がある。本日の授業はこのことにマッチし

ていて、生徒は笑顔で、声もたくさん出ていて楽しそうに運動に取り組んでいた。また運動する中で、上着を脱ぐなど体が温まっている様子も見られ、運動量が確保されていたように思う。また授業者の丹羽先生の授業計画の成果もあり、男女が話せるような工夫を丹羽先生が声かけして大変よかった。課題としては生徒の説明から運動に入るまでに時間がかかっていたように思う。しかしその時間が、結果的に身体を休ませる時間となっていた。また活動への質問や応答を生徒同士行うことによって「言語活動」につながっていたように思う。学校体育では「生涯にわたって健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実践するための資質能力の育成」という目標がある。小学校、中学校、高校と学校体育を学ぶ。特に高校は学校体育の出口でもあり、高校卒業後に就職する生徒にとっては、その後運動するとなると、職場などで、男性、女性、年齢差や障害の有無に関係なくみんなで楽しめるような運動をすることになると思うが、生涯にわたり心身の健康の保持増進と、豊かなスポーツライフを実践していくということにつながる。新しい学習指導要領から「共生」という言葉が出てくる。そのようなこともあり今後の高校体育では是非、「男女共習」を取り入れてほしい。様々な課題はあるかもしれないが、実際にやってみると意外とうまくいくことがある。互いの身体に気付きや配慮をすることによって、社会に出て行くための勉強になるのではないか。また「運動が苦手だからやらない」「障害があるからやらない」ではなく、体育教師が教材、教具、ルール、場の工夫を行い取り組んでいかなければならない。またコミュニケーションを取るのが苦手な生徒に対しても、周囲と一緒に楽しく取り組ませるためにはどうすればよいかを考え、様々な工夫をしてほしい。運動の苦手な生徒に運動内容を合わせると、運動の得意な生徒がフラストレーションを感じてしまうことがある。時には運動の得意な生徒に合わせた内容の運動をするなど、最終目標をしっかりと定め授業作りをしてほしい。

最後に、令和四年の新学習指導要領の年次進行に合わせて指導と評価の一体化として各領域の計画表を作成し、各学校でそれを意識した授業に取り組んでほしい。

【授業の様子】

